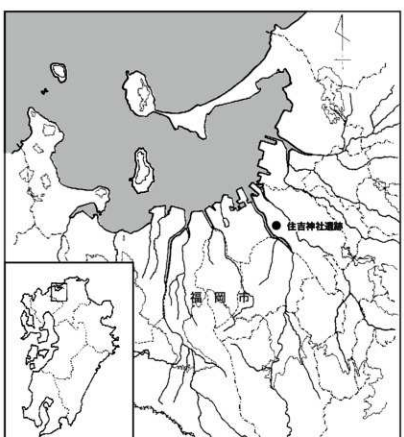
住吉神社遺跡2

— 住吉神社遺跡第3次調査報告 —

2017
福岡市教育委員会

住吉神社遺跡2

―― 住吉神社遺跡第3次調査報告 ――



調査番号　1408
調査略号　SYJ-3

平成29年
福岡市教育委員会

序

福岡市は、原始より大陸文化流入の門戸として栄え、市内に多くの埋蔵文化財が残っています。このため、先人たちの足跡である埋蔵文化財の保護に努めるとともに、まちづくりの目標のひとつに「海と歴史を抱いた文化の都市」を掲げ、実現を目指しております。

本書は、店舗建設に伴う住吉神社遺跡第３次発掘調査について報告するものです。この調査では中世～江戸時代の屋敷跡を検出するとともに、遺物も多数出土しました。これらは地域の歴史の解明を進める上で重要な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成29年3月27日

福岡市教育委員会
教育長　星子明夫

例　　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が福岡市博多区住吉２丁目地内の店舗建設予定地内において、2014 年度（平成 26 年度）に実施した住吉神社遺跡第３次発掘調査報告書である。
2. 実測図に付した座標値は平面直角座標形第Ⅱ座標系（世界測地系）で、磁針方位（磁北）は 6°40′ 西偏する。なお、個別遺構図に付した方位は全て真北を示す。
3. 本書では遺構ごとに一連の遺構番号を付け、番号の前にＳＤ（溝）、ＳＥ（井戸）、ＳＫ（土壙）などの遺構の性格を示す分類記号を付した。
4. 本書に係る遺物・遺構の実測、写真撮影は蔵本正志が担当し、細石朋希、服部瑞輝、相原聡子、大場友子、旗要久美子、熊埜御堂和香子、山口朱美の協力を得た。
5. 本書に係る遺物の陶磁器の産地および生産年代については大橋康二氏（元佐賀県立九州陶磁文化館館長）のご教示を頂いたが、文責は蔵本正志にある。
6. 本書の執筆・編集は蔵本正志が担当し、中間千衣子、宮崎由美子の協力を得た。
7. 本書の発掘調査に係る遺物・記録類のすべては、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されている。

遺跡名・調査次数	調査番号	遺跡略号	調　査　地	面　積	調　査　期　間
住吉神社遺跡第３次	１４０８	ＳＹＪ－３	博多区住吉２丁目	1,317.4 m^2	2014.5.20～2014.9.24

本 文 目 次

第Ⅰ章　はじめに …… 1
　1．発掘調査に至る経緯 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
第Ⅱ章　調査の記録 …… 4
　1．試掘調査の概要 …… 4
　2．発掘調査の概要 …… 4
　3．遺　構 …… 6
　4．遺　物 …… 18
第Ⅲ章　まとめ …… 60

挿 図 目 次

Fig. 1　調査地位置図（1/250,000） …… 1
Fig. 2　調査地周辺遺跡分布図（1/30,000） …… 2
Fig. 3　「博多古図」（絵馬） …… 2
Fig. 4　調査地位置図・遺跡範囲図（1/6,000） …… 3
Fig. 5　調査範囲図（1/700） …… 3
Fig. 6　遺構配置図（1/200） …… 5
Fig. 7　SE07 遺構実測図（1/30） …… 13
Fig. 8　SE12 遺構実測図（1/30） …… 13
Fig. 9　SE24 遺構実測図（1/30） …… 13
Fig. 10　SE34 遺構実測図（1/30） …… 13
Fig. 11　SE40 遺構実測図（1/30） …… 14
Fig. 12　SE49 遺構実測図（1/30） …… 14
Fig. 13　SE65 遺構実測図（1/30） …… 14
Fig. 14　SE66 遺構実測図（1/30） …… 15
Fig. 15　SE68 遺構実測図（1/40） …… 16
Fig. 16　SE79 遺構実測図（1/40） …… 16
Fig. 17　SE82 遺構実測図（1/40） …… 17
Fig. 18　SE84 遺構実測図（1/40） …… 17
Fig. 19　SD01 上層出土遺物実測図①（1/3・1/4） …… 19
Fig. 20　SD01 上層出土遺物実測図②（1/3） …… 20
Fig. 21　SD01 上層出土遺物実測図③（1/3） …… 21
Fig. 22　SD01 中層出土遺物実測図①（1/3・1/4） …… 22
Fig. 23　SD01 中層出土遺物実測図②（1/3） …… 23
Fig. 24　SD01 下層出土遺物実測図①（1/3） …… 25
Fig. 25　SD01 下層出土遺物実測図②（1/3） …… 25
Fig. 26　SD01 下層出土遺物実測図③（1/3・1/4） …… 26
Fig. 27　SD05 出土遺物実測図（1/3） …… 27
Fig. 28　SD11 出土遺物実測図（1/3・1/4） …… 28
Fig. 29　SD15 出土遺物実測図（1/3） …… 31
Fig. 30　SD20 出土遺物実測図（1/3） …… 31
Fig. 31　SD21 出土遺物実測図（1/3・1/4） …… 31
Fig. 32　SD22 出土遺物実測図（1/3・1/4） …… 32
Fig. 33　SD23 出土遺物実測図（1/3） …… 32
Fig. 34　SD36 出土遺物実測図（1/3） …… 33
Fig. 35　SD37 出土遺物実測図（1/3） …… 33
Fig. 36　SD44 出土遺物実測図（1/3・1/4） …… 33
Fig. 37　SD47 出土遺物実測図（1/3） …… 33
Fig. 38　SD51 出土遺物実測図①（1/3） …… 35
Fig. 39　SD51 出土遺物実測図②（1/3・1/4） …… 37
Fig. 40　SD61 出土遺物実測図（1/3） …… 38
Fig. 41　SD69 出土遺物実測図（1/3） …… 38
Fig. 42　SD72 出土遺物実測図（1/3） …… 38
Fig. 43　SE 出土遺物実測図①（1/3・1/4） …… 40
Fig. 44　SE 出土遺物実測図②（1/2・1/3） …… 41
Fig. 45　SE85 出土遺物実測図（1/3） …… 42
Fig. 46　SE88 出土遺物実測図（1/3） …… 42
Fig. 47　SK02 出土遺物実測図①（1/3） …… 45
Fig. 48　SK02 出土遺物実測図②（1/3） …… 46
Fig. 49　SK03 出土遺物実測図（1/3・1/4） …… 48
Fig. 50　SK06 出土遺物実測図（1/3） …… 49
Fig. 51　SK08 出土遺物実測図（1/3） …… 49
Fig. 52　SK14 出土遺物実測図（1/3） …… 50
Fig. 53　SK17 出土遺物実測図（1/3） …… 50
Fig. 54　SK26 出土遺物実測図（1/3・1/4） …… 50
Fig. 55　SK28 出土遺物実測図（1/3） …… 52
Fig. 56　SK30 出土遺物実測図（1/3） …… 53
Fig. 57　SK31 出土遺物実測図（1/3） …… 53
Fig. 58　SK33 出土遺物実測図（1/3） …… 53
Fig. 59　SK 出土遺物実測図（1/2・1/3） …… 56
Fig. 60　SP 出土遺物実測図（1/3・1/4） …… 57
Fig. 61　遺構検出出土遺物実測図（1/3） …… 57
Fig. 62　出土石製品実測図（1/2） …… 58
Fig. 63　出土銅銭拓影（1/1） …… 59

図 版 目 次

表　紙　筑前國一之宮 住吉神社　本殿
P L. 1　調査地周辺航空写真（1947 年撮影）
P L. 2　調査地周辺航空写真（1947 年撮影）
P L. 3　調査地周辺航空写真（1961 年撮影）
P L. 4　調査地周辺航空写真（1969 年撮影）
P L. 5　（1）調査地周辺航空写真（2008 年撮影）
　（2）調査地現況写真（2016 年撮影）
P L. 6　（1）調査区全景（東から）
　（2）調査区東半部（北から）
P L. 7　（1）調査区西半部（西から）
　（2）調査区西半部（北から）
P L. 8　（1）溝 SD01（北から）
　（2）溝 SD01 獣骨出土状況（東から）
　（3）溝 SD11・15（北から）
　（4）溝 SD05・51（南から）
　（5）溝 SD21・23 検出状況（南から）
　（6）溝 SD21 遺物出土状況（北から）
　（7）溝 SD21・23（南から）
P L. 9　（1）溝 SD22（東から）
　（2）溝 SD44・47（東から）
　（3）溝 SD60（東から）
　（4）井戸 SE07（東から）
　（5）井戸 SE10（東から）
　（6）井戸 SE12（西から）
　（7）井戸 SE12（西から）
　（8）井戸 SE16（南から）
P L. 10（1）井戸 SE24（南から）
　（2）井戸 SE24（南から）
　（3）井戸 SE24（南から）
　（4）井戸 SE32（南から）
　（5）井戸 SE34（南から）
　（6）井戸 SE34（南から）
　（7）井戸 SE34（南から）
　（8）井戸 SE39（南から）
P L. 11（1）井戸 SE40（南から）
　（2）井戸 SE40（南から）
　（3）井戸 SE40（南から）
　（4）井戸 SE41（東から）
　（5）井戸 SE49（東から）
　（6）井戸 SE49（西から）
　（7）井戸 SE49（西から）
　（8）井戸 SE53（東から）
P L. 12（1）井戸 SE56（東から）
　（2）井戸 SE57（南から）
　（3）井戸 SE58（東から）
　（4）井戸 SE65（南から）
　（5）井戸 SE65（南から）
　（6）井戸 SE66（東から）
　（7）井戸 SE66（東から）
　（8）井戸 SE66（南から）
P L. 13（1）井戸 SE68（北東から）
　（2）井戸 SE68（北東から）
　（3）井戸 SE68（北西から）
　（4）井戸 SE76（南から）
　（5）井戸 SE77（南から）
　（6）井戸 SE79（東から）
　（7）井戸 SE82（西から）
　（8）井戸 SE82（西から）
P L. 14（1）井戸 SE83（東から）
　（2）井戸 SE84（南から）
　（3）井戸 SE84（東から）
　（4）井戸 SE88（東から）
　（5）井戸 SE89（南から）
　（6）井戸 SE95（北から）
　（7）井戸 SE95（北から）
　（8）井戸 SE95（北から）
P L. 15（1）土坑 SK26（南から）
　（2）土坑 SK26 堆積状況（東から）
　（3）土坑 SK28 遺物出土状況（西から）
　（4）土坑 SK28（西から）
　（5）土坑 SK33 遺物出土状況（東から）
　（6）土坑 SK50（南から）
　（7）土坑 SK54（南から）
　（8）土坑 SK75（東から）
P L. 16　出土遺物（1）
P L. 17　出土遺物（2）
P L. 18　出土遺物（3）
P L. 19　出土遺物（4）
P L. 20　出土遺物（5）
P L. 21　出土遺物（6）
P L. 22　出土遺物（7）
P L. 23　出土遺物（8）
P L. 24　出土遺物（9）
P L. 25　出土遺物（10）
P L. 26　出土遺物（11）

第Ⅰ章　はじめに

1．発掘調査に至る経緯

福岡市経済観光文化局埋蔵文化財審査課（現 埋蔵文化財課）は、平成 26 年１月 21 日付で福岡市博多区住吉２丁目 49-1 番、49-2 番における店舗建設工事に先立つ埋蔵文化財の有無についての照会（受付No.25−2−1107）を受け、当該地の埋蔵文化財の有無についての書類審査を行った。その結果、申請地（4,550.86㎡）は当時の埋蔵文化財包蔵地域「住吉神社遺跡」に隣接しており、遺跡の広がりが懸念されることから試掘調査が必要との判断に至った。試掘調査は、平成 26 年２月６日、申請地に５本の試掘坑を設定して実施した結果、１ヶ所で地表下 1.2ｍの明黄褐色シルト～粗砂上面において遺構を検出し、遺構埋土から土師器坏片が出土した。

埋蔵文化財審査課（現 埋蔵文化財課）は試掘結果を受け、計画される建設工事が実施された場合には遺跡に影響が及ぶものと判断し、事業者と文化財の取り扱いについて協議を行った。その結果、予定する工事事業対象面積のうち、当該工事により埋蔵文化財が影響を受けると予想される範囲については記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

その後、平成 26 年５月７日付けで事業者を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財調査業務委託契約を締結し、埋蔵文化財調査課（現 埋蔵文化財課）が同年５月 20 日から発掘調査を、平成 27～28 年度に資料整理、平成 28 年度に報告書の作成を行うこととなった。

2．調査の組織

調査委託者　株式会社 延田エンタープライズ

調 査 主 体　福岡市教育委員会

	平成 26 年度（調査）	平成 28 年度（報告書作成）
経済観光文化局文化財部長	西 島 裕 二	菊 田 浩 二
同　部　埋蔵文化財課長	常 松 幹 雄	常 松 幹 雄
調査・整理担当（埋蔵文化財課主任文化財主事）	瀧 本 正 志	瀧 本 正 志
庶務・経理担当（埋蔵文化財課管理係）	横 田　忍	横 田　忍
事前審査担当（埋蔵文化財課事前審査係）	板 倉 有 大	清 金 良 太

※平成 28 年４月、埋蔵文化財調査課と埋蔵文化財審査課は組織統合して埋蔵文化財課となった。

Fig. 1　調査地位置図（1/250,000）　【国土地理院発行20万分の１地勢図（福岡）を使用】

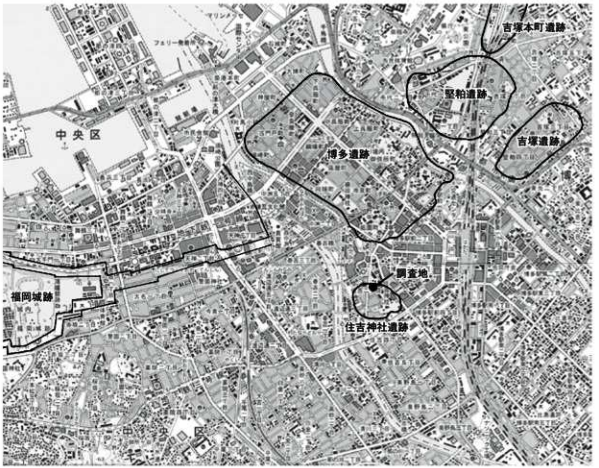


Fig. 2　調査地周辺遺跡分布図（1/30,000）　【国土地理院発行2万5千分の1地勢図（福岡・福岡南部）を使用】

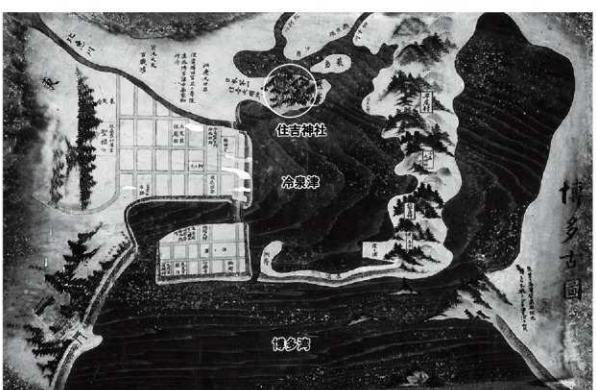


Fig. 3 「博多古図」（絵馬）　【筑前國一之宮 住吉神社蔵】

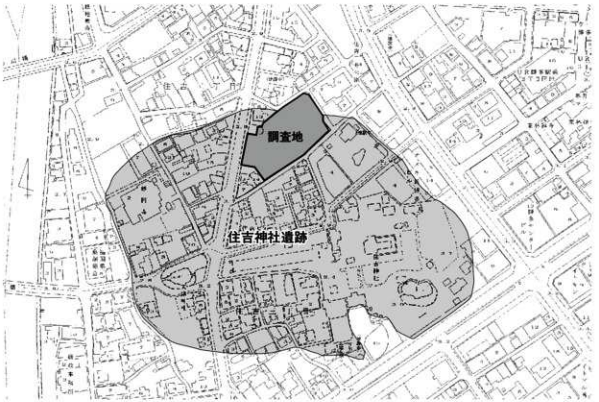


Fig. 4　調査地位置図・遺跡範囲図（1/6,000）

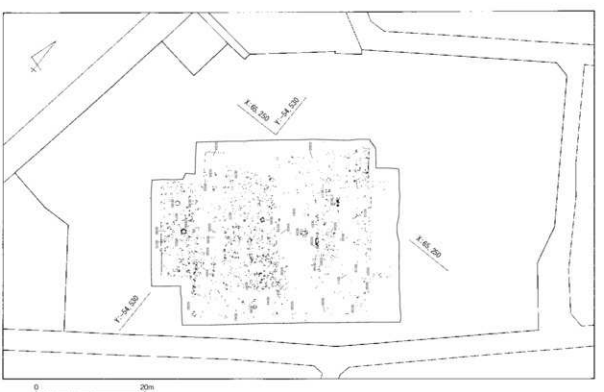


Fig. 5　調査範囲図（1/700）

第Ⅱ章　調査の記録

1．試掘調査の概要

試掘調査地は、筑前國一之宮住吉神社の北西150mに位置する。同神社に奉納された絵馬の中に、博多の地形を鎌倉時代に描いたとされるものを江戸時代に複写した「博多古図」（Fig.3）がある。当図で住吉神社は、博多湾奥を砂州（長濱）で劃された内湾（冷泉津）の最奥部に位置し、陸繋島もしくは岸から突出した岬風に記された地上に描かれている。当図で試掘調査地は、神社の北側に位置することから、旧比恵川河口もしくは岸辺にあたる。現況は、那珂川東岸から200mほどの距離を測る標高3mの更地（駐車場）である。

試掘調査は、平成26年2月6日、試掘坑を工事予定地内の南辺に3ヶ所、北辺に2ヶ所を設定し、合計長46m・幅0.8m・面積36.8㎡で実施した。北辺東に位置するトレンチ1では地表下1.6mまでは石炭ガラ。その下層は明黄褐色粗砂。南辺中央と東に位置するトレンチ2と3では地表下0.9m～1.2mまで灰褐色粘質土・客土、その下層は明黄褐色粗砂。南辺西に位置するトレンチ4では、地表下0.8mまで灰褐色粘質土、1.05m～1.2mまで灰色粘質土、その下層の明黄褐色シルト～粗砂上面で遺構を確認した。遺構から土師器坏片が出土。北辺西に位置するトレンチ5では、地表下1.2mまで灰褐色砂質土、1.6mまでは灰褐色粘質土、その下層は明黄褐色粗砂で遺構・遺物は未検出。この結果、当地が古砂丘の北縁に位置し、これまでの住吉神社遺跡の遺跡範囲が拡大して含まれることとなった。拡大する遺跡の北辺確定は、試掘調査時に当地が駐車場として営業していたことから詳細な試掘が困難であった。このため、調査対象範囲の北辺はトレンチ4と5の中間に仮設定し、発掘調査で確定させることとなった。

2．発掘調査の概要

調査は、地表面から遺構面に至る深さ0.8～1mの表土・整地土をバックホウで除去後、人力による遺構検出作業を行った。遺構検出面（地山）の花崗岩風化土のマサ土が堆積した黄褐色砂質土層上面は、一部に近代～現代の撹乱壙を残す平坦面で、標高2mを測る。調査は、調査地を東西に二分して実施した。

遺構は、中世～近世の屋敷に関連する掘立柱建物、井戸、溝、柱穴、小穴などを黄褐色砂質土層面で検出したが、下層において文化面は検出されなかった。掘立柱建物は棟筋が溝と並行するものが大半で、柱穴には建物の沈下や揺らぎを防ぐための板石や詰石の措置がなされている。

遺物は、主に10世紀後半～17世紀の土師器、施釉陶器、焼締陶器、須恵器、磁器、石製品等が各遺構から出土し、総量コンテナ198箱を数える。内容的には日用雑器の皿、椀、鉢、土鍋、甕、石鍋、石臼と威信財の輸入陶磁器である青磁、白磁、施釉陶器に大別される。

測量は任意の座標によって基準点測量を行い、3mメッシュに基づいた1/20縮尺遺構実測を実施した。また、調査区の土層断面図および個別遺構図を適宜作成した。なお、任意座標については、調査終了前に公共座標（世界測地系座標）を付与した。

写真は、小型35㎜や中型6×7版カメラで個別遺構および調査区全体の撮影を高所作業車等から行い、モノクロフィルム、スライドフィルム、デジタル媒体に記録した。

発掘調査は平成26年（2014年）5月20日に開始、同年9月24日に終了。発掘調査範囲は、表土を調査前に調査委託者が除去する中、遺跡が当初設定範囲から北へ広がることが判明して1,317.4㎡となった。

資料整理は平成27年度（2015年度）～平成28年度（2016年度）、報告書作成を平成28年度（2016年度）に実施し、2017年3月27日に調査報告書を刊行するに至った。

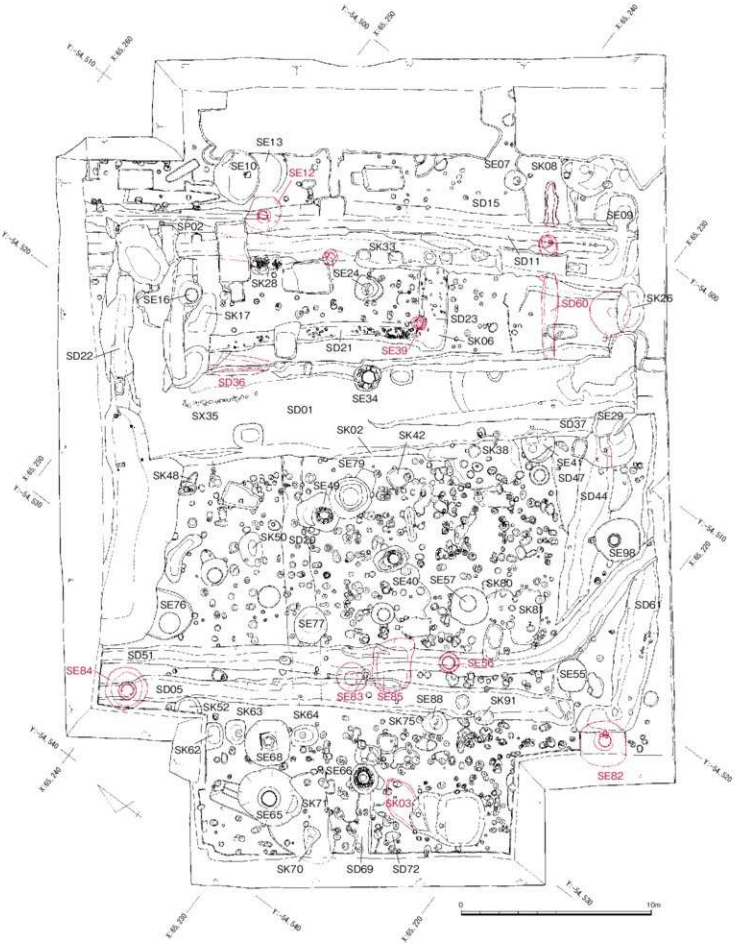


Fig. 6　遺構配置図 (1/200)

3．遺構

（1）溝（SD）

SD01（Fig.6　PL.6･8）

調査区中央に位置し、南東から北西へ直線的に流れる大溝で、溝の両端は調査区外へ延びる。調査区内の北西部端は、溝SD22で壊される。全長26m以上・幅4.6m～5m・深0.7mを測り、溝底は平坦で幅2.4m～4mを測る。溝は、両縁および壁面の状況から規模を縮小しながら埋没する。

SD05（Fig.6　PL.6･7･8）

調査区西半部に位置し、南東から北西へ直線的に流れる溝。南端部では東に折れ曲がるSD47・60とで一体化して矩形の平面形を形成する。溝の方向はSD01と似ているが、僅かに東偏する。溝の北西端は調査区外に伸びる。検出長は25.5m・幅1.2～1.5m・深0.3mを測る。底面は狭い平坦面を成し、断面形は皿形を呈する。溝はSE83･84･85、SK86･87･89･91が埋没後に開削。

SD11（Fig.6　PL.6･8）

調査区東半部に位置し、南東から北西へ直線的に流れる溝。溝の北西端は調査区外へ延び、南東端は調査区南辺近くで東方へ折れ曲がる。全長29m以上・幅1.2m～1.6m・深0.5mを測り、溝底は平坦で幅0.4m～0.8m。断面形はU字形を呈する。

SD15（Fig.6　PL.6･8）

調査区東半部、SD11の東側に位置し、南東から北西へ直線的に流れる溝で、溝両端部は調査区外へ延びる。検出長は30m・幅1.2～1.5m・深0.5mを測り、溝底は平坦で幅0.2～0.3m。

SD19（Fig.6　PL.6）

調査区南東隅部に位置し、SD11の南端部から東方へ折れ曲がる溝。断面形はU字形を呈する。SE09により東端部は壊される。

SD20（Fig.6　PL.6･7）

調査区西半部中央に位置し、南西から北東へ直線的に流れる浅い溝。SD21が埋没後に開削される。溝の両端部は調査区内で消失するが、北東端部で北西方向へ直角に折れ曲がる様相が見られる。検出長は10m・幅1.5m・深0.1m。

SD21（Fig.6　PL.6･8）

調査区中央に位置し、南東から北西へ直線的に流れる溝である。溝の北西端は調査区外へ延び、南東端は調査区中央近くで東方へ直角に折れ曲がる溝SD23とで矩形を呈する。全長19m以上・幅0.9m～1.1m・深0.4mを測り、溝底は平坦で幅0.4m～0.6m。

SD22（Fig.6　PL.6･7･9）

調査区西辺部に位置し、南東から北西へ直線的に流れる大溝。溝は調査区西隅近くで北方向へ直角に折れ、調査区外へ延びる。南東端は調査区北隅近くで立ち上がり消滅。全長20m以上・幅1.8m～3.4m・深1.0mを測り、溝底は平坦で幅0.5m～1.8m。

SD23（Fig.6　PL.6･8）

調査区中央に位置し、北東から南西へ直線的に流れる溝。溝の北東端は調査区内で消滅し、南西はSD23と重なる。全長4m以上・幅1.5m・深0.4mを測り、溝底は平坦で幅0.9m。

SD36（Fig.6　PL.6）

調査区中央に位置する直線的な溝。SD01・21に遺構の両端が壊される。全長4.2m以上・幅0.5～0.9m・深0.2mを測り、溝底は平坦で幅0.3m。

SD44（Fig.6　PL.7･9）

調査区南東半部、SD47に重なるように位置し、南東から北西方向へ直線的に流れる溝。SD47が埋没後に開削。幅1.6～1.8m・深0.7mを測り、溝底は平坦で幅0.6～1.1m。

SD47（Fig.6　PL.7･9）

調査区南東半部に位置し、南東から北西へ直線的に流れる溝。当初は溝の南西端部でSD05と重なり、SD60と矩形を形成する。溝の北東端部は調査区外へ伸びる。溝南側縁はSD44に壊され、全容は不明。全長25m以上・幅1.0m以上が想定される。

SD51（Fig.6　PL.7･8）

調査区西半部に位置する溝で、南東から北西へ流れるが、途中で向きを北へ偏向して直線的に調査区外へ延びる。SD05･20･44･47･61、SE56･83･85の埋没後に開削する。

SD60（Fig.6　PL.6･9）

調査区東半部中央に位置する直線的溝で、SD44と一連の溝を形成する。

SD61（Fig.6　PL.7）

調査区南隅に位置し、北東から南西へ直線的に流れる溝。溝の南西端部は北方向へ直に折れ曲がる。北東端部はSD94へ繋がり、調査区外に延びる。幅1.6m・深0.5mを測る。SD51、SE98に先行する。

SD69（Fig.6　PL.7）

調査区南西辺に位置し、北東から南西へ直線的に流れる浅い溝。溝の北東端はSE66に壊されり、南西端は調査区外へ伸びる。全長3.4m以上・幅0.8～0.9m・深0.1m。溝底は平坦で幅0.9m。

SD72（Fig.6　PL.7）

調査区南西辺に位置し、北東から南西へ直線的に流れる浅い溝。

（2）井戸（ＳＥ）

SE07（Fig.6･7　PL.6･9）

調査区南東部に位置し、僅かに井戸底部を残す。掘方は直径1.1mの円形。深さは0.6m。壁面は弧を描くように立ち上がる。底面中央部は直径0.3m・深さ0.3mを測る円筒状に一段下がり、曲物の痕跡と考えられる。底面の海抜高は1.2m。井戸枠などの構造物は確認されない。

SE09（Fig.6　PL.6）

調査区東部隅に位置し、底部だけ残存。掘方は円形を呈し、深さ0.6mまで確認。

SE10（Fig.6　PL.6･9）

調査区北部隅近くに位置し、SE13の埋没後に築く。掘方は円形を呈し直径3m・深さ1.2mを測る。壁面は弧を描くように立ち上がる。井戸枠などの構造物は確認されない。

SE12（Fig.6･8　PL.6･9）

調査区北部、SE10の南に位置し、SE13の埋没後に築く。掘方は円形を呈し、直径1.8m・深さ0.9mを測る。井戸枠は底板を抜いた円筒桶を井戸底面から三段以上重ねる。桶は幅6cm・全長48cm・厚1cmの湾曲した杉板を内径48cmの円筒形に配置し、割り竹の箍で固定。残存する井戸枠は、直径48cm・高さ48cmを測る。底面の海抜高は0.8m。

SE13（Fig.6　PL.6）

調査区北部、SE12の北に位置し、SE10・12の構築で壊されて全容は不明。掘方は直径2.5mほどの円形が復元される。深さは1.1m。井戸枠などの構造物は確認されない。底面の海抜高は0.8m。

SE16（Fig.6　PL.6･9）

調査区北部に位置し、攪乱により遺構の北半部が壊されるが、掘方は直径1.4mほどの円形が復元される。深さは0.9m。壁面は垂直に立ち上がる。井戸枠などの構造物は確認されなかったが、底面で直径0.7mを測る井筒痕跡が残り、円筒桶を重ねたものと推定される。底面の海抜高は1.2m。

SE24（Fig.6･9　PL.6･10）

調査区東半部中央に位置し、不整形な円形の平面形を呈する。壁は底に向かって直線的に内傾しながら隅丸方形の底面に至る。南側の壁の途中には馬蹄形状をした最大幅0.2mのテラス面がある。上面で長径1.5m・短径1.3m、底面で方0.6m、深さ1.5mを測る。中央部には径0.5mの灰が充填した穴があり、元の井筒内と考えられる。底面の海抜高は1.0m。井戸枠などの構造物は確認されなかったが、幅10cmの板材が残っていることから、円筒桶を重ねたものと思われる。

SE29（Fig.6　PL.7）

調査区東辺に位置し、井戸と推定される。掘方は径1.7mを測る円形を呈し、底面は方0.9mの隅丸方形。井戸枠などの構造物は確認されない。

SE32（Fig.6　PL.6･10）

調査区東部中央、SE29の西に位置する近世以降の井戸。掘方は径1mの円形。中央には全長25cm・幅20cm・厚3cmを測り湾曲した瓦質の側板を内径60cmの円形（一段10枚）に組み合わせた井戸筒。

SE34（Fig.6･10　PL.6･10）

調査区中央に位置し、SD01の埋没後に築いた井戸。掘方は径1.5mの円形を呈し、壁は底に向かって垂直的に円形の底面に至る。井戸側は底面から1mの間に高さの異なる円筒桶を四段重ね、その上部に自然石を直径0.6mの円形状に積み重ねる。最下段の桶は全長60cm・幅6～8cm・厚1cmを測る湾曲した板を径60cmの桶板として用いる。底面の海抜高は0.4m。

SE39（Fig.6　PL.6･10）

調査区中央、SE24の南に位置する井戸で、SD21・23に先行する。掘方は径1mの円形を呈し、深さは1.1mを測る。壁は底に向かって直線的に内傾しながら円形の底面に至る。掘方中央には直径40cmの円形の井戸側痕跡が残り、円筒桶もしくは曲物を重ねたものと推定される。井戸底の標高は0.2m。

SE40（Fig.6･11　PL.7･11）

調査区東半部中央に位置する井戸で、掘方の平面形は楕円形。壁は階段状を呈し、楕円形の底面に至る。上面で長径1.7m・短径1.3m、底面で長径1.0m・短径0.8m、深さ1.4m。井筒は底板を抜いた曲物を重ね置き、底面から0.6mまでに四段が残存。最下段曲物は、内径46cmを測り、曲物外面4箇所に幅4.5cm・全長39cm・厚0.5cmの杉板を突き立てて井戸底に固定する。底面の海抜高は0.7m。

SE41（Fig.6　PL.7･11）

調査区東辺部、SE32の北東に位置する井戸。掘方は、不正形な円形で、径1.8m。井戸枠などの構造物は確認されない。

SE49（Fig.6･12　PL.7･11）

調査区中央部に位置する井戸で、掘方の平面形は洋梨形で、長径2.2m・短径2.0mを測る、壁は底に向かって直線的に内傾しながら隅丸方形の底面に至る。北西側の壁の途中には三日月状をした最大幅0.5mのテラス面がある。井戸側は底面から1.2mの間に円筒桶を二段重ね、その上部に自然石を直径0.5mの円形状に三段積み重ねる。下段円筒桶の内径は45cm。全長75cm・幅5～8cm・厚1cmの24枚の板を割竹の箍で結束する。上段の桶は、木質部は残存していないが、桶板や箍の圧痕から内径51cm、高さ45cmが復元される。底面の海抜高は0.5m。

SE53（Fig.6　PL.7･11）

調査区西半部に位置する井戸で、近代以降と推定される。掘方は直径1.1~1.2mを測る円形。壁は深さ0.9mの底面まで垂直に下がる。井戸枠などの構造物は確認されなかった。

SE55（Fig.6　PL.7）

調査区南部に位置する井戸で、SD47・51の埋没後に築く。掘方は直径1.8mの円形で、深さは0.4m。壁面は下部で狭くなるものの垂直に下がる。井戸枠などの構造物は確認されない。

SE56（Fig.6　PL.7･12）

調査区中央に位置し、SD51に先行する井戸。掘方は直径1.1mを測る円形。深さは1.8m。壁は底に向かって直線的に内傾しながら円形の底面に至る。掘方中央には直径68cmを測る円形の井戸側痕跡が残ることから、円筒桶を重ねたものと推定される。井戸底の標高は0.4m。

SE57（Fig.6　PL.7･12）

調査区南部に位置する井戸で、SK80の埋没後に築く。掘方は直径2.0mの円形。深さは1.8m。壁面は下部では僅かに狭くなるが、ほぼ垂直に下がる。掘方の中央部に直径0.9mの井筒跡が残る。

SE58（Fig.6　PL.7･12）

調査区中央、SE40の西に位置する近世以降の井戸。掘方は直径1.2mの円形。中央には全長25cm・幅20cm・厚3cmの湾曲した瓦質側板11枚で内径63cmの円形に組み合わせて一段とする井筒が残る。井筒は四段以上で構成。

SE59（Fig.6　PL.7）

調査区西部、SE53の北側に位置する近世以降の井戸。掘方は長軸1.5m・短軸1.4mを測る楕円形で、中央には全長25cm・幅20cm・厚2.7cmを測り湾曲した瓦質の側板12枚を内径73cmの円形に組み合わせて1段とする井筒が残る。井筒は5段以上で構成。

SE65（Fig.6･13　PL.6･12）

調査区西隅、SE68の西に位置する井戸。掘方は楕円形を呈し、壁は底に向かって直線的に内傾しながら円形の底面に至る。南壁の中段に最大幅30cmの三日月状のテラスを設ける。井戸側は円筒桶を重ねたもので、底面に接する下段桶とその上段桶の一部が残存する。下段円筒桶の口径は上端部で70cm、下端部で75cmを測り、裾が広がる。円筒桶は全長85cm以上・幅9~11cm・厚2cmを測る湾曲した23枚の板を割竹の箍で固定。上段円筒桶は下半部だけ残存。円筒桶は、全長45cm以上・幅8~12cm・厚3.5cmの湾曲した24枚の板で組み合わせた円筒を割竹の箍で固定。下端部の口径は72cm。

SE66（Fig.6･14　PL.7･12）

調査区南半部西辺に位置する井戸側が石積みの井戸。掘方は直径1.5mを測る円形。壁は直線的に内傾し、井戸底から1.2mより下位は垂直に落ちて円形の底面に至る。井戸側は自然石を円形に積み重ねて築き、底に近づくに従って井戸側の径は小さくなる。石積みが残る上端で直径0.7m、下端部で0.6mを測る。井戸底には円筒桶を井戸の目玉として設置する。円筒桶は、全長36cm・幅3~5cm・厚1cmを測る湾曲した板を割竹の箍で固定したもので、上端径が33cm、下端径39cmを測る円錐台形。井戸底の標高は0.2m。

SE68（Fig.6･15　PL.7･13）

調査区西隅、SE66の東に位置する深さ1.9mの井戸。掘方は直径2.5mを測る円形で、壁は底に向かって直線的に内傾しながら円形の底面に至る。井戸側は井戸底に底板を抜いた曲物を設置し、その上部に円筒桶を重ね置く。曲物は直径39cm・高24cm。円筒桶は、全長64cm・幅9~12cm・厚1cmの内湾する板15枚を円形に組み合わせ、箍で締める。直径56cmが復元される。この円筒桶の上端部面

の外側には直径75cmを測る竹製の箍が廻る。円筒桶の上段に一回り大きい桶が設置されていたものと推定される。さらに、同じ高さで箍に外接し、方形に配された桟材が残る。桟材に沿って縦板材の一部が認められることから、四隅桟柱縦板組みの可能性も残る。井戸底の標高は0.1m。

SE76（Fig.6　PL.7·13）

調査区西隅に位置する井戸で、北部を溝SD22に壊される。掘方は楕円形の平面形で、短径2.5m・長径2.8mが復元される。掘方の南壁より寄りに円形の井戸側痕跡が残り、直径1.1mを測る。

SE77（Fig.6　PL.7·13）

調査区西半部中央、SE76の南に位置する井戸で、井戸枠などの構造物は確認されい。掘方は楕円形を呈し、長径2m・短径1.7m・深0.8m。壁は底に向かって直線的に内傾しながら円形の底面に至る。

SE79（Fig.6·16　PL.7·13）

調査区中央部に位置し、SE49に遺構の一部を壊される。井戸枠などの構造物は確認されなかった。掘方は円形の二段掘りで、直径は上段で2.2m、下段で1.3mを測り、壁面は底に向かって直線的に内傾しながら円形の底面に至る。壁面途中のテラスは幅0.1～0.2mを測る。井戸枠などの構造物は確認されなかった。井戸底の標高は0.75m。

SE82（Fig.6·17　PL.7·13）

調査区南隅に位置し、井戸側は円筒桶を重ねた深さ1.9mの井戸。遺構の北半部が溝SD61に壊される。直径2.4mの円形掘方は、壁面が直線的に内傾しながら円形の底面に至る。井筒は掘方の中央に設け、二段の円筒桶が残る。下段の内径57cm・高さ1mの円筒桶は、幅10cm・厚2cmの湾曲した21枚の板を割竹の箍で固定する。上段の内径66cmの円筒桶は上半部を決失して全形は不明だが、幅10cm・厚2cmの湾曲した25枚の板を割竹の箍で固定する。桶の重なりは30cm。井戸底の標高は0.1m。

SE83（Fig.6　PL.7·14）

調査区西半部中央に位置する井戸で、SD05・51に先行して設ける。井戸枠などの構造物は確認されなかった。掘方は直径1.5mの円形を呈し、壁は底に向かって直線的に内傾しながら円形の底面に至る。井戸底の標高は1.1m。土坑の可能性も残る。

SE84（Fig.6·18　PL.7·14）

調査区西隅に位置し、井戸側は円筒桶を重ねた深さ1.5mの井戸。遺構の上部がSD05に壊される。直径2.2mの円形の掘方は、壁面が直線的に内傾しながら円形の底面に至る。井筒は掘方の中央に設けた二段の円筒桶。下段の円筒桶は、上端径63cm・下端径76cm・高さ72cmの円錐台形を呈する。円筒桶は、全長72cm・幅8cm・厚2cmを測る湾曲した27枚の板を割竹の箍で固定する。上段の円筒桶は箍だけが残存し、全容は不明。井戸底の標高は0.4m。

SE85（Fig.6　PL.7）

調査区西半部中央、SE83の東に位置する井戸で、SD05・51に先行する。井戸枠などの構造物は確認されなかった。掘方は隅丸長方形の平面形を呈し、壁は底に向かって直線的に内傾しながら底面に至る。上縁で長辺1.4m・短辺1.0mを測る。井戸底の標高は1.3m。土坑の可能性が残る。

SE88（Fig.6　PL.7·14）

調査区南、SE56の西に位置し、SD05に先行する井戸。掘方は直径1.2mの円形で、深さは1.8m。壁は底に向かって直線的に内傾しながら円形の底面に至る。井戸底の標高は1.0m。井戸枠などの構造物は確認されなかった。

SE89（Fig.6　PL.7·14）

調査区北半部東辺に位置する井戸で、深さ2.7mまで確認。掘方は円形で、壁は垂直に下がり、上

縁から2.5m以下では広がりを見せる。壁面の崩落によるものであろう。

SE95（Fig.6　PL.7･14）

調査区南隅、SE29の西に位置する。井戸側が円筒桶を重ねた深さ1.9mの井戸。遺構の北半部がSD44に壊される。直径2.4mの円形掘方は、壁面が直線的に内傾しながら円形の底面に至る。井筒は掘方の中央に設け、二段に重ね置いた円筒桶が残る。下段の円筒桶は、上端径48cm・下端径52cm・高さ77cmの円錐台形を呈する。円筒桶は、全長77cm・幅9～11cm・厚3cmを測る湾曲した板を割竹の箍で固定。上段の円筒桶は上半部を決失して全容は不明であるが、下端部径54cmを測り、幅6～9cm・厚1.5cmの湾曲した板を割竹の箍で固定。桶の重なりは12cm。井戸底の標高は0.7m。

SE98（Fig.6　PL.7）

調査区東部中央、SE95の西に位置する近世以降の井戸で、近代に改修している。改修前は掘方が径2.4mの円形を呈し、中央には全長28cm・幅21～23cm・厚2.5～3cmを測り湾曲した瓦質の側板10枚と半截したもの1枚を一段として内径63cmの円形に組み合わせた井戸筒を配する。

（3）土坑（ＳＫ）

SK02（Fig.6　PL.6）

調査区中央に位置し、SD01に遺構の大半が壊される。

SK03（Fig.6　PL.6）

調査区南半部、SE66の南に位置する不整形な楕円形の土坑で、南部を撹乱により欠失する。長辺推定3.2m・短辺1.7mを測り、残存する深さは0.2mである。

SK06（Fig.6　PL.6）

調査区中央、SD21とSD23との交点に位置する円形の浅い土坑。直径1.8m・深さ0.2mを測る。

SK08（Fig.6　PL.6）

調査区東部、SE07の南に位置する土坑もしくは浅いくぼみ。

SK14（Fig.6　PL.6）

調査区東部に位置する不整形なくぼみ。

SK17（Fig.6　PL.6）

調査区北隅に位置し、遺構の北部をSE16や現代撹乱で壊される。隅丸長方形の平面形が復元され、長辺2.4m・短辺1.6m・深さ0.7mを測る。壁は底に向かって直線的に内傾しながら底面に至る。

SK18（Fig.6　PL.6）

調査区北隅に位置する楕円形の土坑で、遺構の西部がSD15により壊される。深さ0.1m。

SK25（Fig.6　PL.6）

調査区東部に位置する隅丸長方形の土坑である。長辺1.6m・短辺0.9m、残存する深さは0.1m。

SK26（Fig.6　PL.6･15）

調査区東部、SK25の南に位置する隅丸長方形の土坑である。長辺2.6m・短辺1.4mを測り、残存する深さは0.6m。

SK27（Fig.6　PL.6）

調査区東辺に位置し、西半部をSD01で壊され、規模は不明であるが、短辺1.4m、長辺1.6m以上を測る。残存する深さは0.4mである。

SK28（Fig.6　PL.6･15）

調査区東半部中央、SE24の東に位置する隅丸長方形の土坑で、遺構の東部をSD11に壊される。

長辺 1.6m・残存短辺 1.0m を測り、残存する深さは 0.6m。壁は直線的に内傾しながら底面に至る。坑内には損傷の無い土師器小皿などを埋めた状態で出土。埋没後には建物の礎石が配される。

SK30（Fig.6　PL.6）

調査区中央に位置する楕円形の浅い土坑。遺構の東半部を SD01 により壊される。深さは 0.1m。

SK33（Fig.6　PL.6･15）

調査区北半部中央に位置し、遺構の東半部は SD11 に壊される。長辺 2.6m・短辺 1.4m・深 0.5m の規模が推定される。

SK38（Fig.6　PL.6）

調査区中央に位置し、SK30・SD01 に先行する浅い土坑。

SK42（Fig.6　PL.6）

調査区中央部に位置する円形の土坑で、直径 1.1m を測る。深さは 0.1m。

SK43（Fig.6　PL.6）

調査区中央部、土坑 SK42 の西に位置する溝状の土坑。長辺 2.0m・短辺 0.5 を測る。深さは 0.3m。

SK45（Fig.6　PL.6）

調査区中央部南に位置する不整形な浅い土坑である。長軸 2.2m・短軸 0.6m を測り、残存する深さは 0.1m。

SK48（Fig.6　PL.6）

調査区西部中央に位置する楕円形の土坑である。長径 1.0m・短径 0.7m を測り、残存する深さは 0.4m。

SK50（Fig.6　PL.6･15）

調査区中央部、井戸 SE53 の北に位置する楕円形の浅い土坑である。長径 1.8m・短径 1.2m を測り、残存する深さは 0.3m。

SK52（Fig.6　PL.6）

調査区西隅に位置する土坑で、遺構の西半部は調査区外に広がる。直径 1.4m の円形の平面形が想定される。深さは 0.3m。

SK54（Fig.6　PL.6･15）

調査区南部、SE57 の南に中央に位置する隅丸長方形の土坑で、SD51 が埋没後に設けている。壁は内傾しながら直線的に底面に至る。底面は西半部が一段深くなる。長 2m・幅 0.9m・深 0.9m。

SK62（Fig.6　PL.6）

調査区西隅に位置する隅丸長方形の土坑である。長辺 1.4m・短辺 1.0m・深 0.4m。

SK63（Fig.6　PL.6）

調査区西隅、SK62 の南東に位置する方 1.3m を測る隅丸方形の土坑。壁は内傾しながら直線的に平坦な底面に至る。深さは 0.4m。

SK64（Fig.6　PL.6）

調査区西隅、井戸 SE68 の南東に位置する隅丸長方形の土坑。壁は内傾しながら直線的に平坦な底面に至る。長辺 1.5m・短辺 1.1m・深 0.2m。

SK67（Fig.6　PL.6）

調査区南半部西辺に位置する隅丸方形の浅い土坑。遺構の西部が SK75 に壊される。方 1.0m を測り、深さは 0.2m。

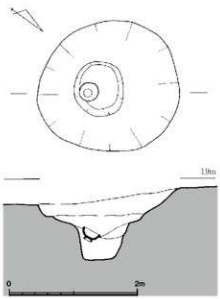


Fig. 7　SE07遺構実測図（1/30）

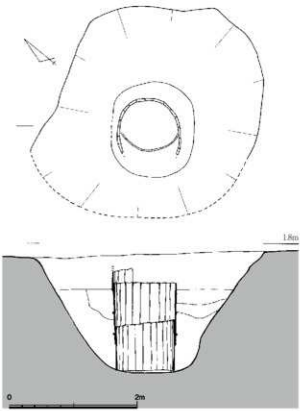


Fig. 8　SE12遺構実測図（1/30）

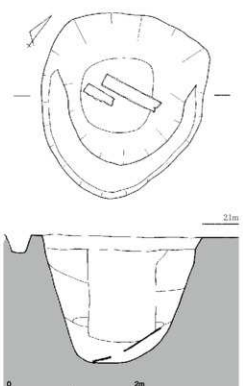


Fig. 9　SE24遺構実測図（1/30）

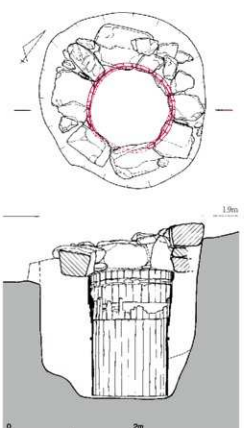


Fig. 10　SE34遺構実測図（1/30）

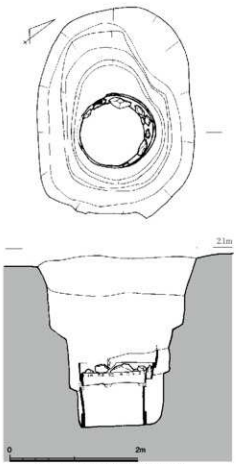
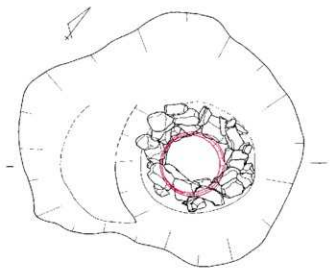
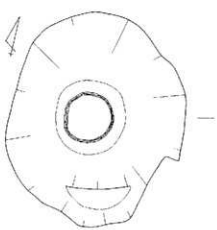


Fig. 11　SE40遺構実測図（1/30）





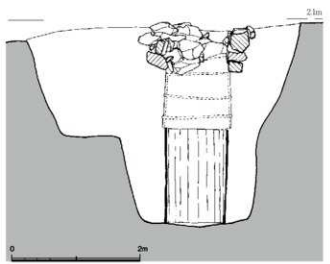


Fig. 12　SE49遺構実測図（1/30）

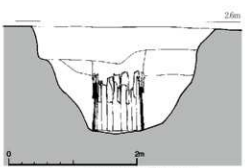


Fig. 13　SE65遺構実測図（1/30）

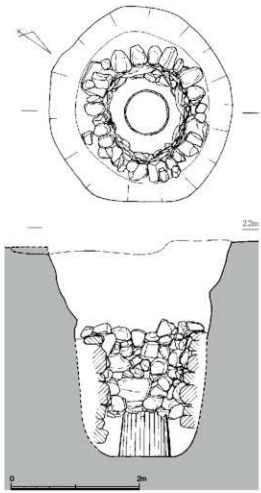


Fig. 14　SE66遺構実測図（1/30）

SK70（Fig.6　PL.6）

調査区南半部西辺に位置する土坑で、平面形が隅丸三角形を呈する。底面は東側が一段深くなり、深さは0.7m。

SK71（Fig.6　PL.6）

調査区南半部西辺に位置する浅い土坑で、遺構の西北部はSE65に壊され、南部は調査区外に広がる。平面形は不整形な楕円形を呈し、長径4.0m以上・短径3.5mを測る。残存する深さは0.1m。

SK73（Fig.6　PL.6）

調査区南西部、SE65とSE68に挟まれた位置にある浅い土坑もしくは凹み。遺構の南半部はSE65によって壊され、全形は不明であるが隅丸長方形の平面形が推定される。

SK74（Fig.6　PL.6）

調査区南半部西辺、SK71の東に位置する浅い土坑もしくは凹み。遺構の南部は溝SD69に壊され全形は不明であるが、隅丸方形の平面形が推定される。

SK75（Fig.6　PL.6･15）

調査区南半部西辺に位置する土坑で、西辺部をSE66で壊される。隅丸長方形の平面形が復元され、長辺1.4m・短辺1.1mが推定される。壁は内傾しながら直線的に底面に至る。深さは0.8m。

SK78（Fig.6　PL.6）

調査区西半部中央に位置する楕円形状の土坑で、遺構の西端部はSD22に壊される。短辺0.8m、長辺2.9m以上を測る。深さは0.7m。

SK80（Fig.6　PL.6）

調査区南部、SK54 の北に位置する浅い土坑で、遺構の一部がSE57、SK54・81 に壊される。隅丸長方形の平面形で、長辺 2.2m・短辺 1.6mが復元される。深さは 0.1m。

SK81（Fig.6　PL.6）

調査区南部、SK81 の東に位置する隅丸長方形の土坑。長辺 2.9m・短辺 1.6m。深さは 0.1m。

SK86（Fig.6　PL.6）

調査区西半部中央に位置する楕円形の土坑。遺構の東半部はSD05 に壊される。長径 2.3m・短径 1.0mが復元される。

SK87（Fig.6　PL.6）

調査区西半部中央に位置する楕円形の土坑で、遺構の東半部はSD05 とSK86 に壊される。長径 2.4m・短径 1.4mが復元される。

SK90（Fig.6　PL.6）

調査区南半部西辺に位置する楕円形を呈する小規模で浅い土坑である。長径 0.9m・短辺 0.5mを測り、深さは 0.1m。

SK91（Fig.6　PL.6）

調査区南部に位置する隅丸長方形の土坑。SD05 に先行する。短辺 0.8m・長辺 1.0m以上。深さは 0.6m。

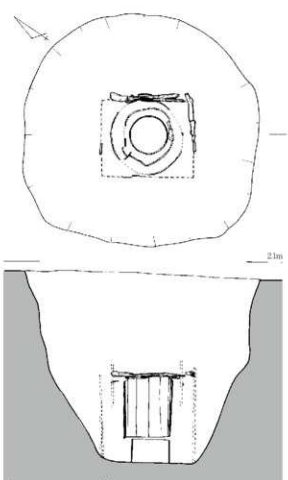


Fig. 15　SE68遺構実測図（1/40）

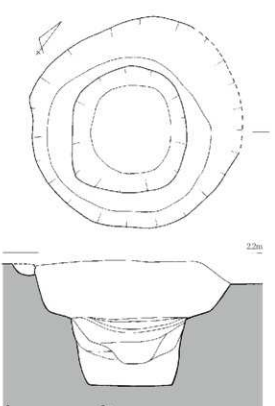


Fig. 16　SE79遺構実測図（1/40）

SK92（Fig.6　PL.6）

調査区南隅に位置する円形の浅い土坑である。直径0.8m・深0.1m。

SK93（Fig.6　PL.6）

調査区南部中央に位置する、溝状に細長い不整楕円形の浅い土坑。長辺3.6m・短辺0.9mを測り、深さは0.2m。

SK97（Fig.6　PL.6）

調査区西半部中央に位置する土坑で、遺構の南半部をSE59に壊されて全形は不明。楕円形の平面形で、長径1.0m・短径0.7mの規模が推定される。深さは0.1m。

（4）柱穴・小穴（ＳＰ）

SP242（Fig.9　PL.5）

調査区中央部に位置し、隅丸長方形の掘方を呈する。長辺1m・短辺0.6mを測り、残存する深さは0.4m。掘立柱建物の柱穴と考えられる。

SP278（Fig.9　PL.5）

調査区中央部に位置し、隅丸長方形の掘方を呈する。長辺35cm・短辺30cmを測り、残存する深さは20cm。

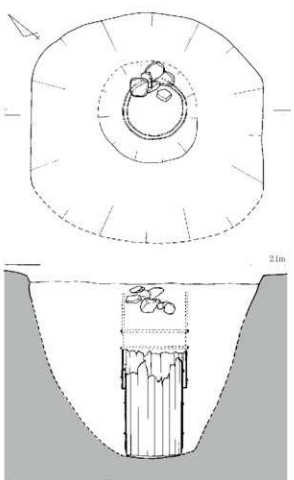


Fig. 17　SE82遺構実測図（1/40）

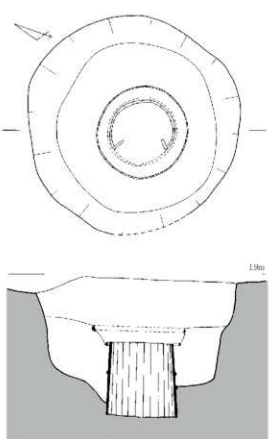


Fig. 18　SE84遺構実測図（1/40）

4．遺物

（1）溝（SD）

SD01（Fig.19～26･63　PL.16）

土師器小皿・坏・台付小皿・台付皿・灯明皿・碗・鍋・すり鉢、瓦質土器碗・鉢・すり鉢、青磁皿・碗・壺・水注、白磁碗・皿・水注・壺、青白磁小壺・合子、染付、天目碗、陶器甕・おろし皿・すり鉢・壺、施釉陶器盤・鉢、須恵器坏、粉青沙器壺、土錘、丸瓦・平瓦・塼、羽口、石鍋、銅銭、木製椀・曲物・箸、獣骨等が出土。

【上層】**394**・**406**は口縁に炭化物が付着する灯明皿。**1**の瓦器椀の高台底面に墨書。**410**・**411**は土師器すり鉢で内面にすり目。内外面とも刷毛目整形の後に外面だけナデ調整。内面に5本歯の櫛ですり目を放射状に施すが、すり目の間隔は広く空く。内面の器面は底から口縁部近くまで使用の摩滅が激しい。**678**・**679**・**681**・**682**は土師質の土鍋で、外面には炭化物が厚く付着。内外面とも刷毛目整形を施し、口縁部の外反が強いものと直線線的なものとがある。Fig.20は青磁。**2**・**27**・**40**は同安窯系の青磁皿。**2**の底部に墨書。**13**・**30**は龍泉窯系の青磁坏。器全面に緑灰色の釉を施した後に畳付の釉を掻き取る。43は口縁が輪花の青磁皿。**49**は底部が蓅筒底の小碗。**3**の見込み中央には四花弁内に四字句（金玉満堂か）を刻んだ印判。釉はオリーブ色。**37**は見込み中央に印花の型押し。胎土は暗乳灰色。釉は緑青灰色。**44**・**47**は龍泉窯系の碗。Fig.21の上半部は青白磁と白磁。**4**・**5**・**42**は口禿げの白磁皿で、底部は平坦で露胎。**4**は灯明皿として使用した痕跡の炭化物が口禿げの口縁端部に付着。**36**は景徳鎮・枢府窯の白磁皿。内面には雲龍文の型押しを施す。高台は短く直立するように削り出す。やや青味みを持つ失透の青白釉を高台内面と畳付を除いて施釉。畳付の釉は掻き取り。口縁部を欠く。14世紀。**31**は中国・広東の白磁碗。**12**は福建の白磁碗。**35**は内面にへら片切彫りの花文を施した白磁碗。**10**は青白磁の有蓋小壺。**7**・**8**は青白磁の合子。**34**は白磁の小碗もしくは坏。器壁が極めて薄く1.5㎜。**9**は建窯の天目茶碗。外面口縁部下は釉薬をふき取り。**90**は象嵌の粉青沙器壺。Fig.21の下半部は陶器および施釉陶器。**15**は瀬戸の施釉陶器おろし皿。内面底全体におろし目をヘラで格子状に施す。底部に糸切り離し痕跡。緑色を帯びた灰釉。15世紀。**21**の鉢は胎土が緻密で、0.05㎜以上の砂粒を含まない。雑釉が施す。**22**は中国・福建の宋代の無釉陶器鉢。口縁部内面に2条の凸帯が廻る。**17**・**20**は鉄釉を口縁部に施した陶器のすり鉢。いずれも中国産と考えられ、内面全体にすり目を施す。17は、胎土に1㎜ほどの砂粒を多く含み、口縁部は肥厚。すり目の間隔は3.5㎜。**20**は胎土が緻密。口縁端部は尖先状。すり目の間隔は3～4.5㎜。**23**は須恵器の坏身。**24**は内面に灰釉が施した宋代の盤。**28**は暗青灰色を呈する東播系の須恵質の鉢。内面にすり目は無いが、器面の摩滅状況から擦る行為を行っている。口縁端部外面だけ自然釉が認められ、鉢を重ねて焼成している。**29**も**28**と同様な使用が行われているが、胎土が極めて粗い。**26**は口縁がY字形の甕で、白泥の化粧掛け。**861**は羽口。横断面形は円形。**862**～**864**は中国浙江省産の平瓦で、粘土板桶巻き作り。**865**も中国浙江省産の丸瓦で、砲弾型の木型に粘土板を巻き付け、二分割する。いずれも12世紀後半～13世紀中頃。**866**・**867**は塼の破片。**10012**は滑石製石鍋の口縁部片で底部を欠く。外面の口縁部下に断面が台形状に張り出す凸帯を廻らす、いわゆる鍔付石鍋である。鍔の基部厚は1.7㎝。鍔の下面まで煤が付着し、口縁部以外の外周面には破面が残る。鍔の下面基部脇には径1㎝の穴を穿つ。**10013**は滑石製の花文型押し施具の破片で全形は不明だが、台形が推定される。幅6.9㎝。型を刻んだ面は左辺に陽刻の三つ葉を配し、中央部には陽刻の花か。裏面は一文字の凸帯を削り出し、凸帯基部の1箇所に径0.5㎝の孔を穿つ。さらに、小さな葉と花の線刻を施す。**10014**は滑石製の石錘。角柱状で両端が尖る。2面には網に留める溝が彫られている。全長5.2㎝・最大厚さ1.3㎝。**10015**は滑

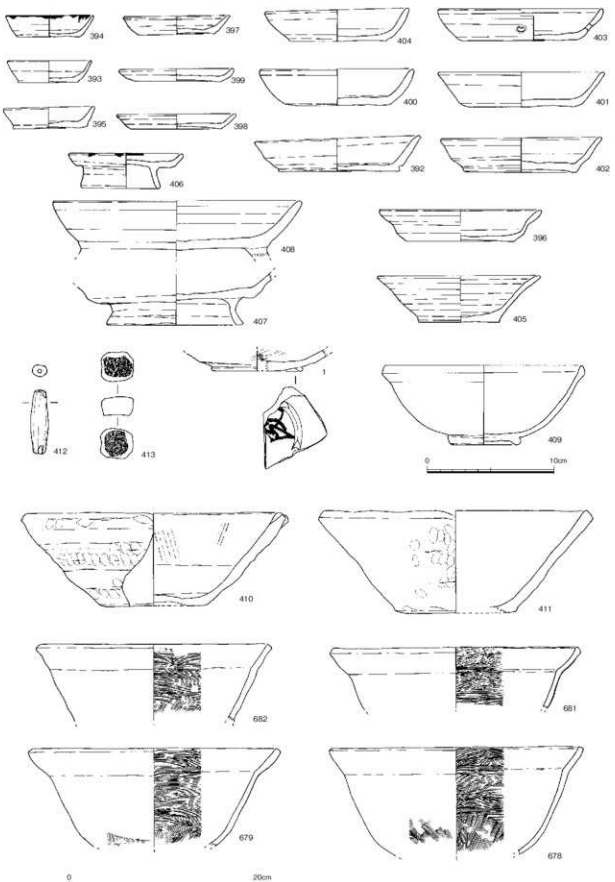


Fig. 19　SD01上層出土遺物実測図① (1/3・1/4)

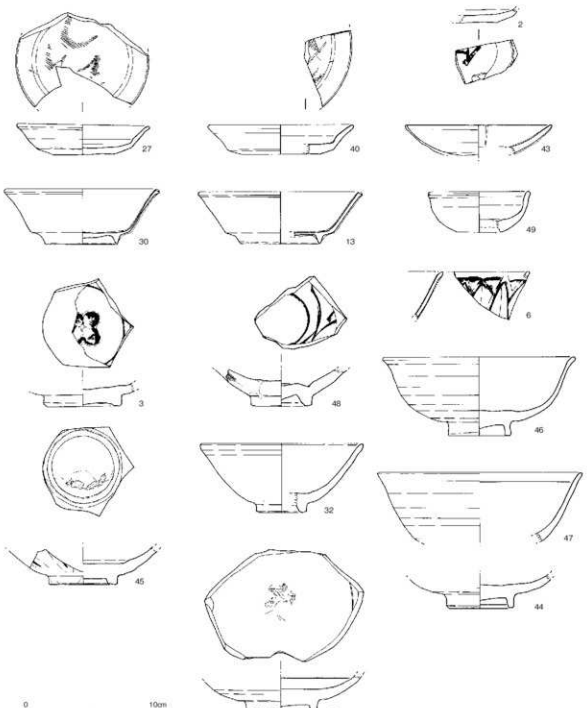


Fig. 20　SD01上層出土遺物実測図② (1/3)

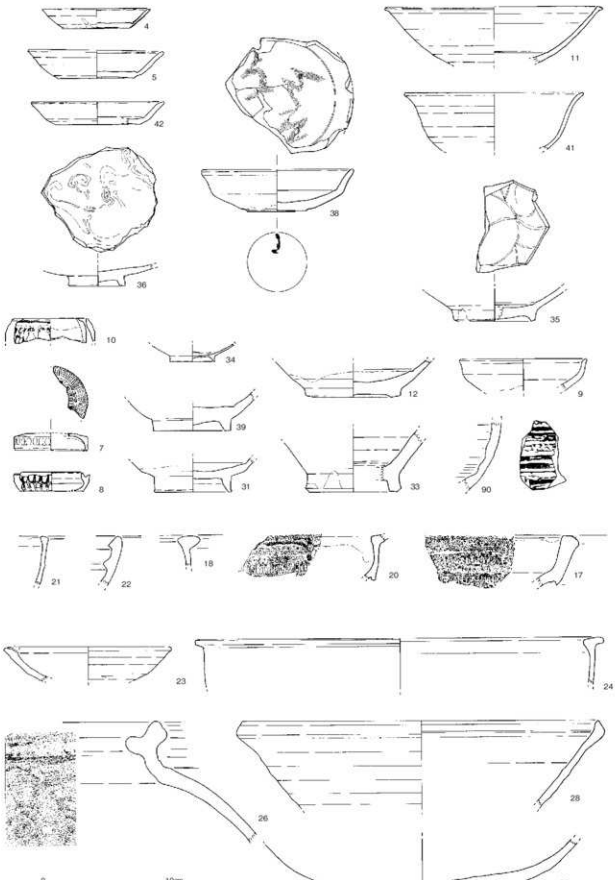


Fig. 21　SD01上層出土遺物実測図③ (1/3)

石製で、扁平な箱状を呈し、広口面中央には直線状の凸帯を削り出す。石鍋片を転用。6 面の破面は 2 次加工する。**10016** は碁石状の石製品。玄武岩を加工。平面形はやや楕円形を呈し、長径 2cm・短径 1.7cm・最大厚 1.9cm。**30001・30002** は癒着して出土した中国・明の銅銭「洪武通寶（真書体）」。

【中層】Fig.22 は土師器。**431・432** は大型の台付皿。**429** は焼き締めのすり鉢で、底部から口縁は直線的に外反する。口縁端部近くは肥厚し、角張って面をなす。灰褐色の胎土は緻密で 1㎜ほどの砂粒を僅かに含む。口縁端部は肥厚し、内面には刷毛目調整の後に 5 本歯の櫛ですり目を間隔を空けて施す。外面はナデ調整。**430** は竹輪状の大型土錘。Fig.23 は磁器と陶器。**64** は龍泉窯系の青磁皿。底部外面に墨書。**52・58** は同安窯系の青磁皿。**51・65** は龍泉窯系の青磁碗の底部を円盤状に打ち欠いた瓦玉（かわらだま）。**65** の底部外面には墨書。**50・59・60** は龍泉窯系の青磁碗。**60** の見込みに 4 字句の押印。**53** は景徳鎮窯の青白磁皿。見込みには型押しの草花魚文。器厚は 2.5㎜。**63** は、いわゆる景徳鎮・枢府窯の白磁皿。内面には型押しの花文。高台は短く直立するように削り出す。やや青味みを持つ失透釉を高台内面と畳付を除いて施す。畳付の釉は掻き取る。底部に墨書。14 世紀。**54・56・62** は白磁碗。**89** の施釉陶器小壺は茶道具の大海茶入で、器高 5.3cm・胴径 8.1cm・底径 4.2cm・口径 5.2cm。胎土に 0.5～1㎜ほどの砂粒を多く含み、器肌は粗い。底部は中央部を僅かに凹ませて縁部を畳付。糸切り痕跡を残す。口縁から肩にかけて暗褐釉を施す。丸瓦・平瓦は中国浙江省産の平瓦で、いずれも 12 世紀後半～13 世紀中頃。

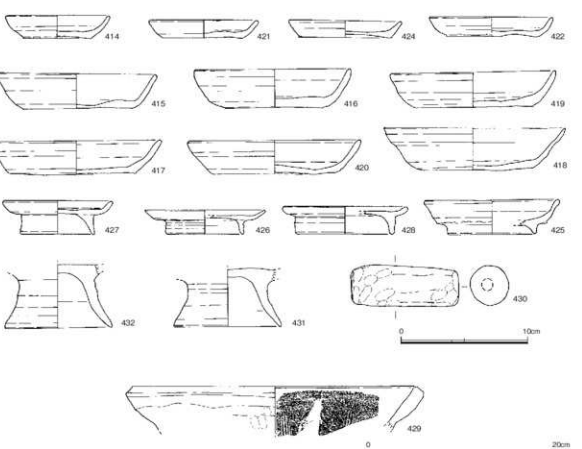


Fig. 22　SD01中層出土遺物実測図①（1/3・1/4）

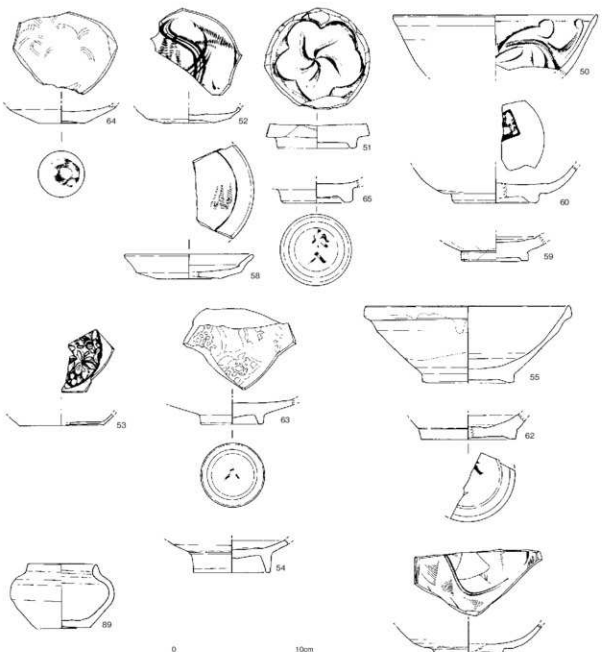


Fig. 23　SD01中層出土遺物実測図②（1/3）

【下層】434～444・447の土師器は底部に糸切り離し痕跡。445は高坏の頸部。82は中国・南宋の施釉陶器すり鉢。口縁部は折り返して肥厚。胎土は緻密で、0.5㎜の砂粒を僅かに含む。内面には四本歯の櫛で浅く細いすり目を放射状に間隔を空けて施す。外面の口縁部下1.5cmまで黒褐釉。平坦な口縁端部に砂目を残す。84・85は中国・福建の陶器の鉢で、底部を欠き、どちらも口縁部内面に2条の凸帯が廻る。0.5～2㎜ほどの砂粒を大量に含む。内面の器面は口縁部近くまで摩滅し、すり鉢として使用。81は施釉壺の底部。0.5～2㎜ほどの砂粒を大量に含む。口縁から肩にかけて黒褐釉を施し、釉が底に垂れ落ちている。底部は、中央部を僅かに凹ませた緑部を畳付とする。67～71・87は龍泉窯系の青磁碗。74は景徳鎮の青白磁の合子蓋。75は青白磁の口禿げ皿で、内面は型押しの施文。66は福建の口禿げ皿。77・79は白磁皿。78・80は白磁の碗。76・86は白磁碗の底部円盤状に打ち欠いた瓦玉。76は福建産。73は口禿げの白磁碗。88は小碗で、底部中央を凹ませて外縁を畳付とする。灘青灰色釉を外面下半部を除く範囲に施す。朝鮮産か？未掲載品の中に大型の羽口が含まれる。平瓦は中国浙江省産の平瓦で、いずれも12世紀後半～13世紀中頃。10001は滑石製の石鍋片で、外面の口縁部下には断面が台形状に張り出す凸帯を廻らす、いわゆる鍔付石鍋。鍔は幅1.6cm・基部厚1.6cm・先端厚0.8cm。鍔の先端面まで煤が付着。口縁部を除く周面には破面が残る。30003は中国・北宋の銅銭「聖宋元寶（篆書体）」。

SD05（Fig.27・62　PL.16）

土師器小皿・灯明皿・坏・台付坏・鉢・すり鉢、青磁碗・皿、白磁碗・皿・八角形坏・壺、粉青沙器壺、染付皿・蓋、陶器壺・鉢・蓋、須恵器蓋・甕・すり鉢、瓦質土器椀・皿・湯釜・火舎、軒丸瓦・丸瓦・平瓦・塼、滑石製石錘が出土。486～498の土師器坏・小皿は、底部切り離しが糸切り。未掲載の土師器坏遺物には、底部にヘラ切り離し痕跡を残すものが少数ある。500は台付の大型皿。501は瓦器皿。底部切り離しはヘラ切り。499は口径が10.5cmほどに復元される香炉もしくは小型の火舎。外面口縁部下に印判による菊花文が廻る。外面底部に貼り付けの脚。207は瓦質土器の湯釜で底部を欠く。肩から胴部は丸味を呈し、球状を想定させる。口縁は短く直立し、口縁端部は丸く仕上げる。肩下に耳が付く。内外面ともに刷毛目が残る。胎土は緻密。外面全体に煤が付着。95は白磁の角坏。高台脇から口縁部をヘラで八角形に面取りし、透明釉を施す。高台は、輪高台に整形した後、4ヵ所をアーチ状にヘラで抉る様に削り、脚的畳付を狭い4点とする特徴を持つ。94は刷毛目粉青沙器の碗。胎土は暗青灰色を呈し、緻密。外面を白泥で刷毛目引き、透明釉を施す。167は中国・景徳鎮の染付皿。16世紀。212は染付の蓋。釉が濁り、呉須の発色も暗い。16世紀末～17世紀前半。213は肥前産と思われる染付小碗。17世紀後半。丸瓦・平瓦は中国浙江省産の瓦で、いずれも12世紀後半～13世紀中頃。10027は石錘。石の両面に網に結わえる紐掛けの溝を刻す。

SD11（Fig.28　PL.17・18）

土師器坏・小皿・すり鉢・鍋、施釉陶器碗、朝鮮青磁・皿、朝鮮青白磁碗、朝鮮陶器碗、白磁皿・小碗・碗・水注、青磁小碗・碗・大型皿・壺、染付皿・碗、陶器壺・蓋・鉢・すり鉢・おろし皿、施釉陶器甕・天目茶碗、須恵器高坏・甕、丸瓦・平瓦・塼、滑石製品が出土。524～529の土師器坏・小皿の底部切り離しは糸切り。225は土師質のすり鉢。口縁端部の内側を嘴状。内面に7本歯の櫛ですり目を間隔を空けて施す。口径30.5cm・底径13.5cm・器高10.2cm。230・232・237・240・242・243は青磁や白磁の碗底部を円盤状に打ち欠いた瓦玉。230は朝鮮産の可能性。237の高台内には墨書。158は明代の龍泉窯の青磁小碗で、外面の蓮花文は簡略化される。オリーブ色の釉を器面全体に施し、畳付部分の釉を削り取る。高台内は兜巾。173は12世紀～13世紀の中国・景徳鎮産と思われる青白磁碗の底部片。乳白色の緻密な胎土に青灰色の釉を高台裾まで施す。見込み中央には直径3cm

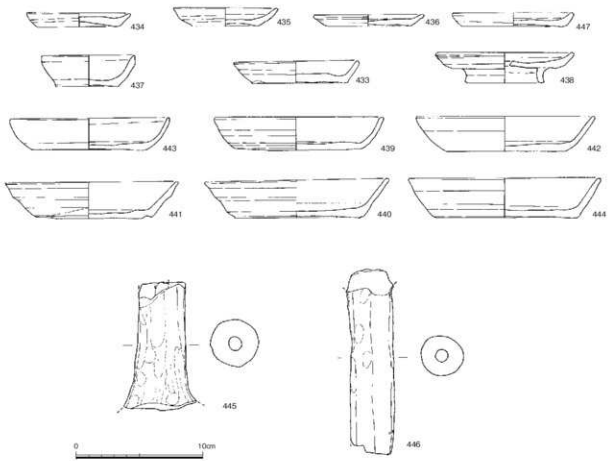


Fig. 24　SD01下層出土遺物実測図①（1/3）

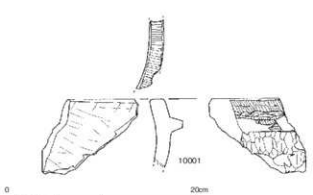


Fig. 25　SD01下層出土遺物実測図②（1/3）

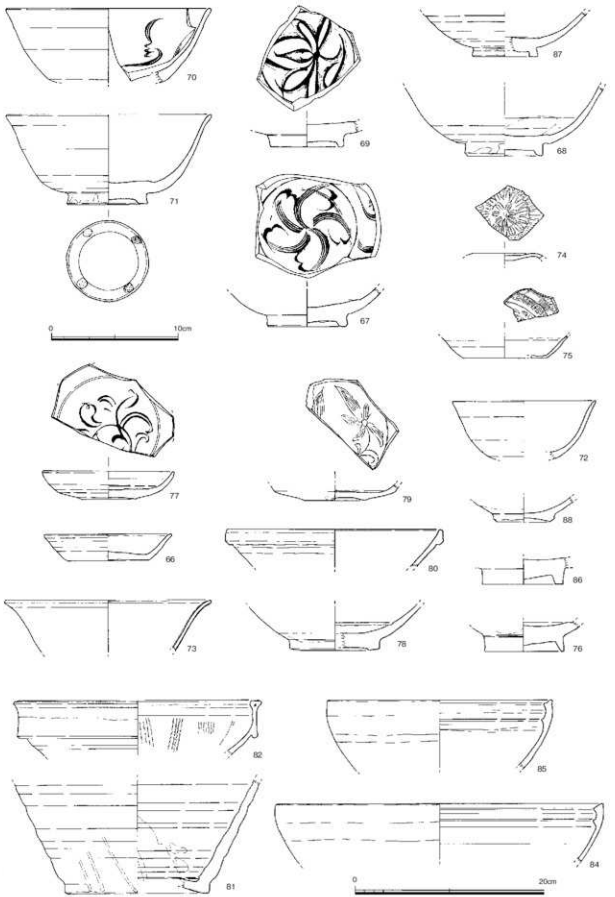


Fig. 26　SD01下層出土遺物実測図③ (1/3・1/4)

ほどの茶溜り。**162** は 15 世紀～16 世紀の中国・景徳鎮の白磁皿。透明釉を器面全体に施し、狭い畳付部分の釉を削り取る。**108** は中国・邵武窯の白磁皿。緻密な胎土は微かに褐色を帯びた白色。透明釉を内面と外面の高台近くまで施す。露胎の高台内は兜巾で墨書がある。15 世紀。**179** は福建の白磁の小碗。外面の削りは口縁部近くまで施す。胎土は緻密で白色。透明釉が内面と外面の高台脇まで施される。露胎の高台内は兜巾で、朱泥もしくは漆で「十」字の筆書がある。14 世紀～15 世紀前半期。**176** は中国・景徳鎮の染付皿。乳灰色を呈する緻密な胎土に見込み呉須で飾る。青味を帯びた透明釉を全面に施し、碁笥高台の畳付部分の釉を掻き取る。16 世紀末～17 世紀前半。**106** は朝鮮・16 世紀後半の白磁碗。やや粗い白色の胎土には 0.5㎜ほどの褐色と黒灰色の砂粒を含む。白色泥土を化粧掛けした後、僅かに緑色を呈する透明釉を施す。見込みと高台に砂目を５箇所設けて焼成。**99・101・110・172** は朝鮮の青灰釉陶器の皿（**110**）と碗（**99・101・172**）。いずれも釉のガラス成分が残っておらず、まるで粉引きのような白泥掛けの器面を呈する。胎土は 0.5～1㎜ほどの砂粒を多く含む。**110** の皿は、器面全面に釉掛けして高台の畳付だけを掻き取る。4 箇所の砂目が高台畳付と見込みに残る。高台内には低い兜巾。16 世紀後半期。**99・172** は同一個体と思われる碗で、口縁部は直線的に外反し、端部は丸く仕上げる。高台は輪高台で低い兜巾。釉を器面全体に施した後に畳付部分だけの釉を掻き取る。砂目が高台畳付と見込みに残る。16 世紀。**100** は青磁小碗で、胎土は緻密で淡青灰色。高台から腰まで削り調整し、口縁は端部近くで外反の度合いを強くする。僅かに青味を帯びた濁灰色の釉を高台脇まで施す。**175・182** は中国・漳州窯の碁笥底の染付皿。**175** の胎土は僅かに黒色微砂粒を含み、灰白色。失透釉を口縁部だけに施し、高台と見込みは露胎。**182** は高台脇を呉須で鋸歯文を廻らす。釉はやや青味を帯びた透明釉。高台だけ露胎。どちらも 16 世紀後半。**174** は中国・景徳鎮の染付碗。

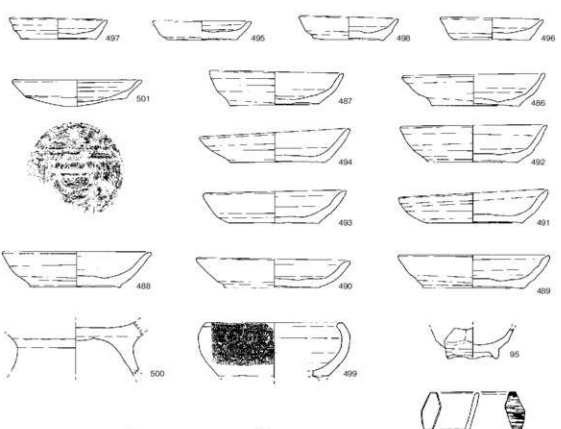


Fig. 27　SD05出土遺物実測図（1/3）

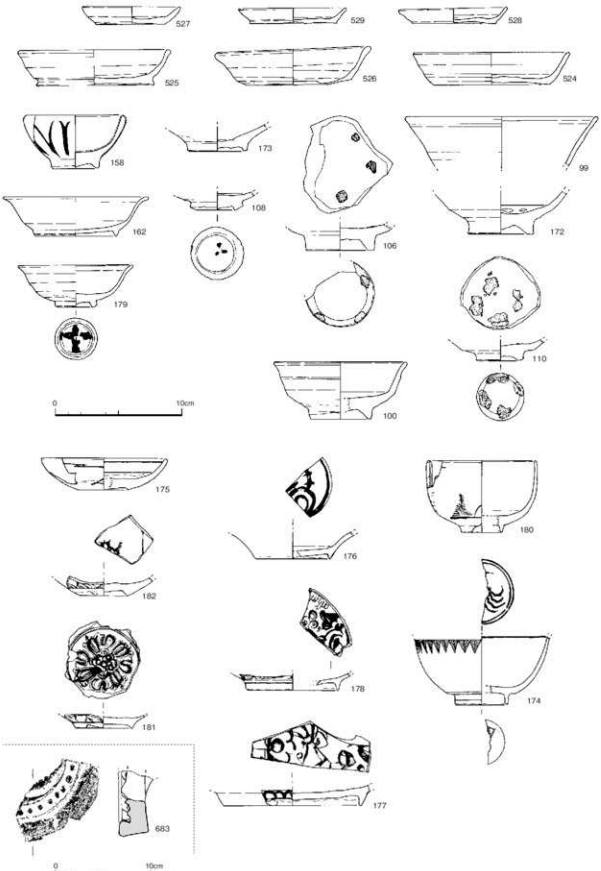


Fig. 28　SD11出土遺物実測図 (1/3・1/4)

見込みの二重圏線内に呉須による蟹文。外面口縁部下に鋸歯文を廻らす。高台内「□□□製」を呉須で筆書き。16世紀末～17世紀初。**181**は中国・景徳鎮窯の染付皿。16世紀後半。**177**・**178**は中国・景徳鎮窯の染付皿。高台のみ露胎。16世紀。**180**は肥前系の小碗。18世紀末～19世紀初。**229**は瀬戸の施釉陶器おろし皿で口縁部を欠く。内面底全体のおろし目はヘラで格子状に施す。底部に糸切り離し痕跡。緑色を帯びた灰釉。15世紀。**226**は施釉陶器のすり鉢。内面全体に細かい櫛で放射状に隙間の無いすり目。内外面に暗褐色釉。底部外面に回転ヘラ削り痕。国産か。**227**は備前焼すり鉢。口縁は端部近くで直立。底面を除く内面に幅3.2cmに15本歯の櫛ですり目を間隔を空けて施す。口径30cm・底径13cm・器高9.3cm。15世紀末～16世紀前半。**683**は三巴文の軒丸瓦。内区に大型の三つ巴、外区に珠文を廻らす。丸瓦・平瓦は中国浙江省産の瓦で、いずれも12世紀後半～13世紀中頃。**10002**・**10003**・**10006**は砥石片。**10004**は花崗岩の摺石。

SD15（Fig.29　PL.19）

土師器碗・坏・小皿、白磁碗・小碗、陶器碗、瓦質土器すり鉢、石製品が出土。**104**は肥前の白磁小碗。型押成形。緻密な白色胎土に透明釉を施す。高台露胎。18世紀。**112**は肥前・現川（うつつがわ）窯と思われる施釉陶器碗。胎土は緻密で茶褐色。僅かに深緑色を帯びた暗灰色釉を施した上面に白泥を刷毛目で塗り、その後に透明釉を施す。畳付の釉を拭き取る。刷毛目は禾目風で、内面は口縁端部から見込み底向かって細い糸が流れるように、外面は口縁端部から高台に向かって細い糸が流れるように高台脇まで施す。18世紀前半。**10017**は碁石状の石製品。径1.7cm・最大厚0.6cm。

SD20（Fig.30）

土師器小皿・坏・高坏、青磁碗・皿、白磁碗・皿、施釉陶器壺、瓦質土器碗・鉢が出土。**255**は中国・福建の白磁碗。12世紀。**257**は中国・福建の白磁碗。高台内に「晴信」の墨書。11世紀後半～12世紀前半。

SD21（Fig.31･62･63　PL.19）

土師器坏・小皿・台付小皿・灯明皿・高坏、青磁碗・皿・壺、白磁碗・皿・壺・水注、染付碗、陶器甕・壺・鉢・すり鉢、施釉陶器蓋・盤・壺、瓦質土器碗・鉢、軒丸瓦・平瓦、銅銭、碁石・滑石製品が出土。Fig.31の**113**・**626**以外は土師器で、切り離しは糸切り。**623**・**630**・**637**の土師器坏は煤が口縁端部の1～7箇所に付着する灯明皿。底部に糸切り離し痕跡。**113**は中国・景徳鎮の型作りによる白磁の有蓋小壺で、底部を欠く。胴部は上位で強く張り、口縁部は短く直立。胴部外面には稜線が廻り、同位置の内面は鋭く折れ曲がる谷線が廻ることから、胴部の張出し部を境にした異なる二個の型から作り出したパーツを接合したものと考えられる。胎土は白色で緻密。白泥を掛けて透明釉を施す。釉口縁端部と口縁内面の釉を拭き取る。元代か。**248**は中国・福建の白磁水注。宋代。**253**は陶器のすり鉢。口縁端部の内側は短い嘴状。内面に6本歯の櫛ですり目を施すが間隔が空く。14世紀。**252**・**254**は施釉陶器のすり鉢。口縁端部外面とその下位に凸帯が廻る。内面全体に3.2cm幅に25本歯の細かい櫛で放射状に隙間の無いすり目。内外面に暗褐色釉。口縁端面に目跡。底部外面は回転ヘラ削り。国産か。**626**は近世以降の軒丸瓦。平瓦は中国浙江省産で、12世紀後半～13世紀中頃。**10029**は滑石製の角柱で、中ほどを1条の凹線が廻る。石鍋の転用。**10028**は砂岩製の砥石。石の目は極めて緻密で、小口面を除く4面を使用。**10030**は碁石状の石製品で、青味を帯びた黒色と青灰色とのマーブル柄。径1.5cm・最大厚0.55cm。**30006**は中国・南宋の銅銭「景定元寶（真書体）」。背文は「五」。

SD22（Fig.32　PL.19）

土師器坏・小皿・鉢、青磁碗・皿・壺、白磁碗・皿・紅猪口、染付碗・大皿・皿、青白磁紅皿、施釉陶器甕・盤・おろし皿、陶器碗・すり鉢、瓦質土器火舎・すり鉢、瓦が出土。**687**は型作りによる

土師器の小型坏。狭い底部から口縁が直線的に外反して立ち上がる。内面には指押さえの指頭圧痕が残る。底部外面には渦巻状の凸線が認められることから、木型は轆轤削りによる凹型である。**689**は土師器小皿の底部を小判形に打ち欠く。長径4.5cm・短径3.8cm・厚0.35～0.55cm。**696**の土師器坏は煤が口縁端部の2箇所に付着する灯明皿。底部に糸切離し痕跡。**691**は土師質の自立する素焼人形で胸部から上を欠く。体を前後に二分した凹型の木型に粘土を入れて取り出し、その後に貼り合わせ。胸部以下は素肌。**258**は中国・福建の白磁皿。12世紀後半。**259**は肥前の染付八角皿の底部片。見込みに蜜柑文。高台径13.5cm。高台底に1箇所の砂目を残し、「□職人町　□□」「□城人□　二□」を朱書。1820年～1860年。**260**は肥前の染付皿。口径9.9cm・高台径6cm・器高2.3cm。**261**は施釉陶器碗。白泥の化粧掛け後に透明釉を掛ける。**688**は近世以降の瓦。

SD23（Fig.33･63　PL.20）

土師器坏・小皿・台付皿・すり鉢・鍋、白磁碗・皿、青磁碗・皿、瓦質土器碗・すり鉢・火舎、陶器鉢・すり鉢、施釉陶器盤、丸瓦・平瓦、砥石・滑石製品、銅銭、鉄製品が出土。

Fig.33は**723**を除く資料が土師器で、切り離しは全て糸切り。**720**は口縁端部に煤が付着する灯明皿。**723**は須恵器坏身。胎土は緻密で茶褐色。口縁部は直線的に内傾しながら短く立ち上がる。

Fig.33は**111**を除く資料が土師器で、切り離しは全て糸切り。**722**は土師器坏の底部を円盤状に打ち欠く。**111**は中国・景徳鎮窯系の口禿げの白磁碗。見込みには草花文の型押し。元代か。**30007**は中国・北宋の銅銭「天聖元寶（篆書体）」。

SD36（Fig.34）

土師器坏・小皿・台付皿、瓦質土器碗、施釉陶器盤、白磁碗が出土。**697**は土師器坏で、底部切り離しは糸切り。

SD37（Fig.35）

土師器坏・小皿・台付皿・高坏・鍋、瓦質土器碗・すり鉢、青白磁碗、施釉陶器壺、陶器すり鉢・甕、平瓦が出土。**120**は中国・景徳鎮の青白磁碗で、底部を欠く。口縁は端部に向かって薄くなり、尖る。胎土は緻密で乳灰色。内面には片切彫りと櫛目による施文。釉は僅かに青味を帯びた灰色透明釉。12世紀。平瓦は中国浙江省産瓦で、12世紀後半～13世紀中頃。

SD44（Fig.36　PL.20）

土師器坏・小皿・皿・台付皿・鍋、瓦質土器碗・湯釜（鍔釜）・火舎、青磁碗・皿、青白磁合子蓋、白磁碗・皿、陶器すり鉢・甕、施釉陶器壺、瓦、下駄が出土。**668**は土師器の小型坏で、口縁が直線的に外反しながら立ち上がる。口縁端部の周囲には煤が連続して付着し、灯明皿として使用。**665**～**667**・**671**・**672**は土師器の小皿と坏。底部切り離しは糸切り。**669**・**670**・**673**・**674**は土師器の小皿と坏。底部切り離しはヘラ切り。**676**は口径36cmが復元される土師器の鉢で、底部を欠く。口縁は直線的に外反し、端部は丸く仕上げる。胎土は1mmほどの長石砂粒を僅かに含む。口縁部下の周囲に煤が付着し、底部近くは被熱のために赤褐色を呈していることから鍋として使用。内外面とも刷毛目調整を施し、外面だけナデを加える。**677**は土師質の湯釜（鍔釜）。器形は球形を呈し、口縁は短く直立。胴部に幅1.3cmほどの鍔が廻る。刷毛目成形し、ナデ調整を施す。胎土は長石・石英砂粒を含む。口径6.8cm・胴部最大径22.8cm・鍔径25cm・器高17.6cmを測る。鍔より下部は厚く煤が付着。**675**は土師質の甕などを円盤状に打ち欠いたもの。**299**は中国・福建の白磁碗。12世紀前半。

SD47（Fig.37･62　PL.20）

土師器碗・坏・小皿・鍋・すり鉢、青磁碗、白磁碗、陶器すり鉢・鉢、施釉陶器碗・壺、須恵器甕・坏蓋、瓦質土器碗、羽口、平瓦・丸瓦、滑石製品、加工木製品が出土。**738**～**741**は土師器の小

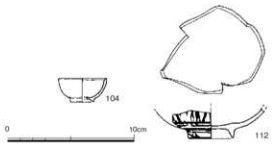


Fig. 29　SD15出土遺物実測図（1/3）

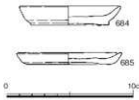


Fig. 30　SD20出土遺物実測図（1/3）

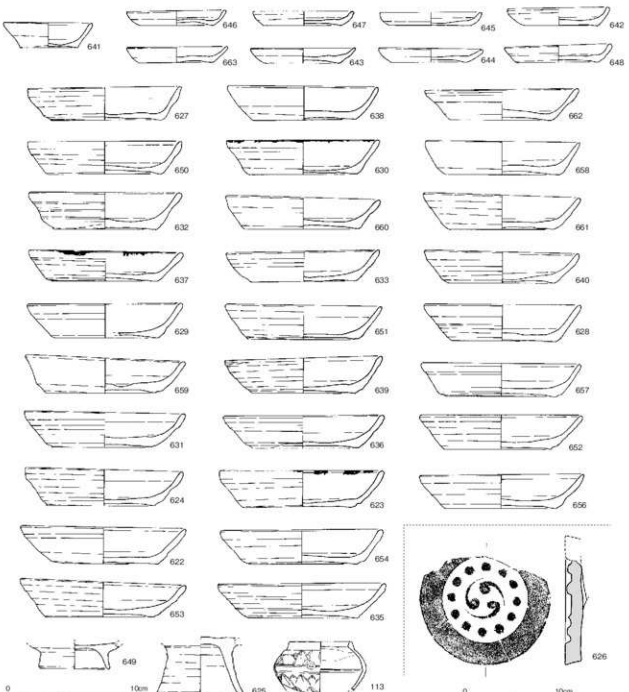


Fig. 31　SD21出土遺物実測図（1/3・1/4）

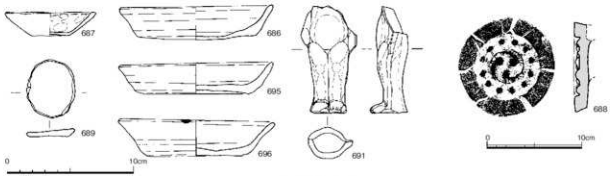


Fig. 32　SD22出土遺物実測図 (1/3・1/4)

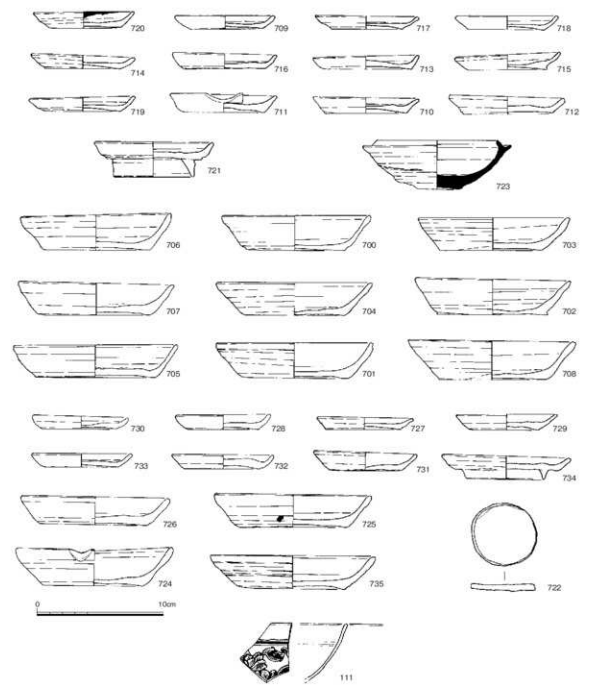


Fig. 33　SD23出土遺物実測図 (1/3)

Fig. 34　SD36出土遺物実測図（1/3）

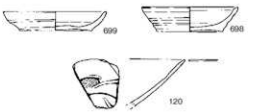


Fig. 35　SD37出土遺物実測図（1/3）

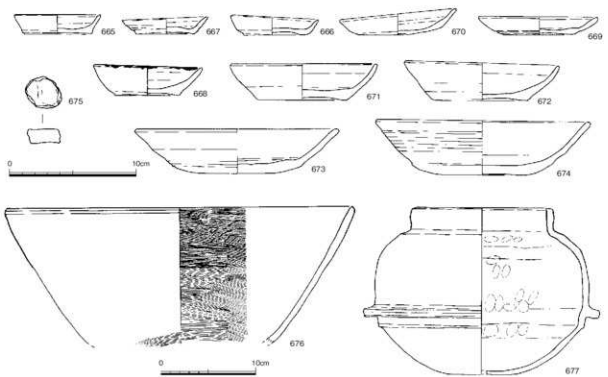


Fig. 36　SD44出土遺物実測図（1/3・1/4）

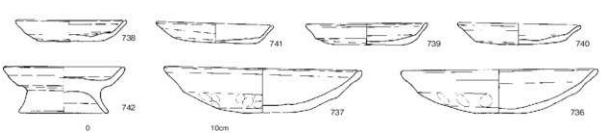


Fig. 37　SD47出土遺物実測図（1/3）

皿で、口径9～9.8cm・器高1.5～1.8cmを測る。**742**は土師器の台付小皿で、台部が脚端部に向かって直線的に外反。口径9.4cm・器高3.6cm。**736**・**737**は土師器の坏で底部は丸味を呈する。口径12.2cm・2.3cm。小皿・坏とも切り離しはヘラ切り。**10018**は滑石製石鍋で、口縁部の破片。石鍋は口縁部外縁の4箇所に箱状突起の把手を縦長に削り出した、いわゆる縦長の耳（把手）を持つ古形態。縦残長4cm・横3.8cm・幅1.8cm。**10031**は板状の滑石製品で片端を欠く。幅7.3cm・厚1.3cm・残存長7.2cm。広口面の短辺中央と隅の2箇所に径8mmの穴を穿つ。表面は黒色化。平瓦は中国浙江省産の瓦で、12世紀後半～13世紀中頃。

SD51（Fig.38～39・62　PL.20・21）

土師器坏・小皿・台付大皿・鍋・すり鉢、白磁碗・ミニチュア碗、青磁碗、青白磁皿・壺蓋、色絵磁器嘯碗・鳥型、染付小碗・皿、天目碗、施釉陶器壺・盤、陶器皿・壺・椀・すり鉢・甕・瓶・鉢、瓦質土器火舎・鍋・碗・小皿・すり鉢、土錘、羽口、丸瓦・平瓦・塼、滑石製品・砥石が出土。**132**は華南三彩の陶片。かすかに褐色を帯びた乳灰色の胎土は0.5mmほどの白色・褐色・黒灰色を呈する砂粒を多く含む。やや軟質の焼き上がりで、暗緑色の釉を施す。**749**～**752**は土師器の小皿。切り離しは、**749**～**751**が糸切り、**752**はヘラ切り。**743**～**748**は土師器の坏。切り離しは、全て糸切り。**321**は中国・龍泉窯の青磁碗。幅の広い片切彫りの蓮弁文を施す。胎土は緻密で灰白色。釉は濁オリーブ色。**309**は中国・龍泉窯の青磁碗。僅かに青味を帯びた灰白色の釉を高台内面と畳付を除く器面に施し、見込みの釉を円形に掻き取る。重ね焼きの痕跡を見込みと高台畳付に残す。明代。**318**～**320**は中国・龍泉窯の青磁碗。**157**は中国・景徳鎮の青白磁の瓶蓋。濁青灰色の透明釉を口縁部近くまで施す。**311**は中国産白磁のミニチュア杯。口径4.7cm・器高2.9cm・高台径2.2cmを測る。釉はやや濁る灰色透明釉を高台脇まで施す。**325**は青白磁の小碗。**129**は青白磁の皿。胎土は緻密で白色。僅かに青味を帯びた透明釉を器面全面に施し、畳付の釉を削り取る。見込みと畳付に砂目が残る。**306**は国産の可能性がある青白磁の皿。胎土は緻密で乳灰色を呈す。高台内面を除く器面に青味を帯びた透明釉を施し、見込みの釉を輪状に削り取る。畳付には粗い砂目が残る。**336**は肥前系の白磁輪花皿。口縁は花弁端に切り込みを入れた8弁の輪花。僅かに青色を帯びる透明釉を器面全面に施し、狭小な畳付の釉を拭き取る。18世紀後半の可能性。**136**～**138**は朝鮮の施釉陶器。**136**は皿で、低い高台を貼り付ける。胎土は緻密。薄い緑白色を帯びた釉を器面全面に施し。高台畳付部分の釉を掻き取る。見込みと高台に砂目を残す。**137**・**138**は碗。どちらも緑色を帯びた透明釉を器面全面に施し、削り高台の畳付部分の釉を掻き取る。見込みと高台には砂目が残る。**139**は肥前の施釉陶器小壺。胎土は緻密で褐色。削出し高台の内面は極めて低い兜冂。釉は濁緑色。1590年～1610年。**307**は朝鮮の白磁碗。薄い緑灰色釉を器面に施し、削り高台の畳付の釉を掻き取る。**312**・**316**は白磁の碗。**317**は中国・福建の白磁碗。見込みに片切彫りで施文。胎土は緻密で乳灰色。濁灰色釉を高台近くまで施す。高台は露胎。12世紀後半～13世紀初頭。**335**は中国・福建の白磁碗。見込みに櫛目の施文。胎土は緻密で乳白色で、高台を除く器面に青色を僅かに帯びた透明釉を施す。12世紀代。**313**～**315**は白磁碗の底部を円盤状に打ち欠いた瓦玉。**313**は高台も打ち欠く。**130**は有田の色絵嘯碗で、広義の柿右衛門。口縁は直線的に外反し、端部は丸く仕上げる。口径は14cmが推定される。白色の胎土に透明釉を施し、内面の口縁下に赤色と緑色の顔料で小さな花と葉を描く。17世紀。**131**は型作りの色絵鶏形の水滴もしくは置物で頭部より下を欠く。赤色と緑色で彩色。**166**は1650年～1670年代の肥前・染付碗。口径14.1cm・器高6.4cm・高台径5.3cm。口縁は底部から内湾しながら立ち上がり、端部は丸く仕上げる。外面には二輪を一単位とする花を呉須で3ヶ所に描く。呉須の圏線が高台脇、口縁部下内外面に廻る。胎土は緻密で乳灰色と呈する。失透釉を器面全体に施し、畳付だけを掻き取る。

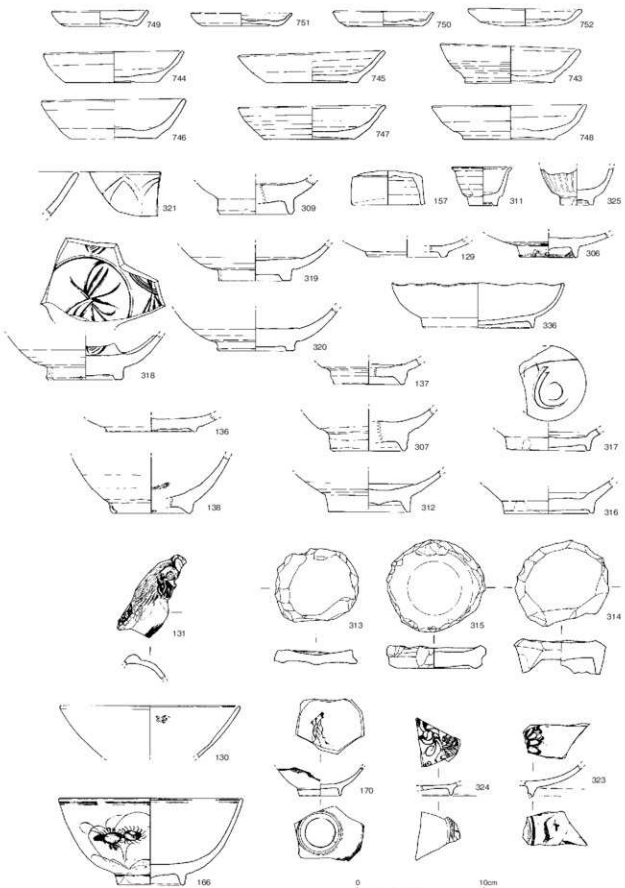


Fig. 38　SD51出土遺物実測図① (1/3)

170は1650年～1670年代の肥前・染付小碗で、口縁部を欠く。見込みに一葉が付いた切り枝を呉須で描く。高台脇と内面には圏線を描く。釉は僅かに青味を帯びた失透釉。器面全体に施釉し、その後に畳付だけ掻き取る。**324**は中国・景徳鎮の染付皿。胎土は緻密で白色。釉は青味を帯び、器面全体に施した後に畳付だけ拭き取る。**323**は染付の碗。見込みに菊花文。**308**は施釉陶器の皿。乳灰色の胎土に濁釉を施す。**326**は国産と思われる施釉陶器皿。胎土は緻密で茶褐色を呈する。口縁内面に褐釉による彩色。見込みには砂目が残る。灰色釉を内面と外面口縁から胴部に施す。**135**は天目茶碗の底部片、**140**は口縁部片。**135**の高台は低く、黒釉が内面と腰部下まで施す。**127**は肥前の施釉陶器碗。胎土は緻密。褐色の釉を器面全体に施す。高台内側縁に焼成時の砂が付着。焼成後に畳付を削る。17世紀後半。**171**は肥前の呉器手陶器碗。口径13.1cm・器高9.1cm・高台径5.1cm。丸味を持つ胴部に口縁端部は僅かに外反し、見込みには茶溜り。高台は縁だけが畳付となるように中央に向かって凹ませる。釉はやや濁る灰色透明釉を高台外面まで施す。1630年～1650年代。**333**は中国・磁灶窯の黄釉陶器盤の底部片。胎土は淡茶灰色を呈し、2㎜ほどの砂粒を含む。平坦な底部は径16.7cmが復元される。内面は深緑灰色の褐釉で施文し、濁黄灰色の釉を施す。**133**は施釉陶器の茶入小壺で、底部を欠く。口径5.4cm・胴部径9.7cmが復元される。大海型の壺で、張り出た胴部外面には一条の凹線が廻る。口縁は短く外反する。胎土は青灰色を呈し、緻密で0.3㎜ほどの長石・石英砂粒を僅かに含む。器面の内外面には黒褐色釉を施す。**134**は肥前の施釉陶器壺の肩部片で、胴部の張った球形を想定させる。茶褐色の胎土は緻密で僅かに0.3㎜ほどの長石・石英砂粒を含む。外面胴部下を白泥で化粧掛け、櫛で格子状に掻き落とす。その後、器面に透明釉を施し、肩と胴部の境を幅1.5cmの帯状に釉を削り取って露胎とする。17世紀後半。**327**のすり鉢は、13本を単位とする櫛のすり目を内面全面に施す。口縁端部は玉縁。胎土は茶褐色を呈し緻密。口縁端部付近だけ鉄釉を施す。**328**も陶器のすり鉢で、口縁端部内面には返しの段が付く。内面にすり目。単位と範囲は不明。胎土は茶褐色を呈し緻密であるが、0.5㎜ほどの長石砂粒を多く含む。口縁端部付近だけ鉄釉を施す。**330**は中国・福建の宋代の陶器鉢。**334**は肥前の陶器すり鉢の底部片。平坦な底部から口縁は直線的に外反する。胎土は赤褐色～茶褐色を呈し、僅かに1㎜ほどの長石砂粒を含む。内面全面に10本歯の櫛ですり目。直径11cmの底部には糸切り離し痕跡が残り、「明石・・□□・・」を墨書。外面器壁の一部に暗褐色釉が垂れていることから、口縁部だけ施釉した可能性。17世紀後半。**332**は須恵質壺の底部片。平坦な底部から胴部は直線的に外反しながら立ち上がる。青灰色を呈する胎土は1～3㎜ほどの砂粒を多く含む。内面は刷毛目整形、外面は刷毛目整形の後にナデ調整。**331**は陶器の甕で、口径38cmが復元される。口縁端部は内側が嘴状。胎土は緻密で、茶褐色。外面口縁部下には黒褐釉を施す。**337**は土師質の土錘。胎土は赤褐色を呈し、緻密。平瓦は中国浙江省産瓦で、12世紀後半～13世紀中頃。**10011**は砥石。**10032**は滑石製。中央部に径7㎜の穿孔。

SD61（Fig.40　PL.21･22）

土師器坏・小皿・台付大型皿・碗・すり鉢・鍋、白磁碗・皿、青磁碗・小碗、染付、朝鮮陶器碗、施釉陶器盤・水注・皿・水注・壺、陶器すり鉢・鉢、丸瓦・平瓦が出土。**754**～**759**は土師器小皿。**758**は口縁端部に煤が付着する灯明皿。**753**は土師器坏。いずれも底部に糸切離し痕跡。**168**は中国・景徳鎮の染付皿。胎土は白色で緻密。見込みには呉須で描いた重圏線内に魚藻文。呉須の発色は深く、釉は青味を帯びる。釉は器面全面に施し、畳付だけの釉を掻き取る。外縁には焼成時の大粒の砂粒が付着。16世紀。**345**･**346**は中国・景徳鎮の染付碗と皿。15世紀～16世紀。**348**～**351**は中国・福建の白磁碗。11世紀後半～12世紀前半。**352**～**355**は中国・龍泉の青磁碗。明代。**169**は朝鮮の白磁輪花碗。復元口径13.1cm・器高6.1cm・高台径4.9cm。腰から胴部にかけては丸味を呈し、口縁端部は

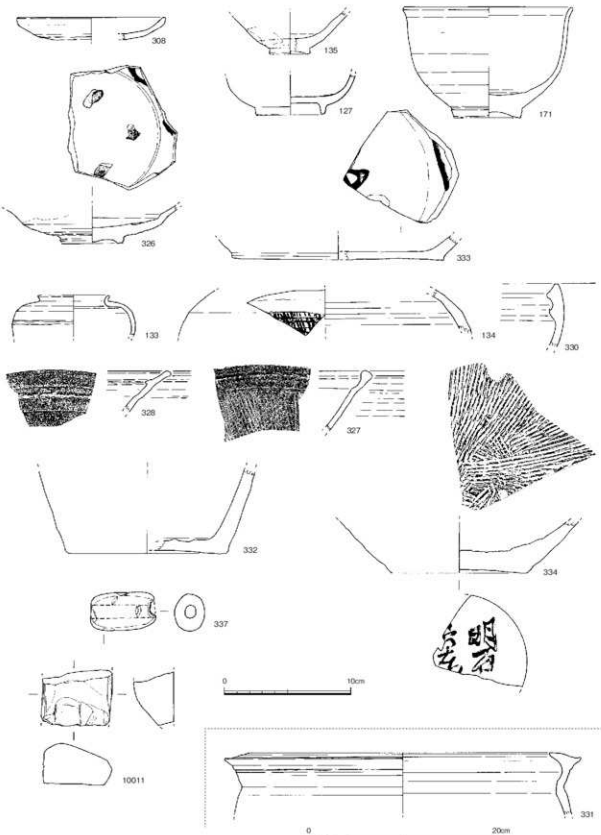


Fig. 39　SD51出土遺物実測図②（1/3・1/4）

外反する。花弁数は不明。見込みには轆轤目と砂目が残る。胎土は白色で緻密。器面全面に僅かに緑色を帯びた透明釉を施し、畳付の釉を拭き取る。高台内は兜巾。16 世紀代か。**344** は朝鮮・白磁碗。16 世紀。**343** は朝鮮の灰青釉陶器碗。**347** は緑褐釉陶器。16 世紀。丸瓦・平瓦は、12 世紀後半～13 世紀中頃の中国浙江省産瓦と日本産平瓦で凸面に重格子叩き目が残るもの。

SD69（Fig.41）

土師器坏・皿、青磁蓋・碗、白磁碗・小皿・壺、陶器鉢、施釉陶器鉢、瓦質土器碗が出土。**144** は白磁の小碗もしくは小皿の底部片。高台は中央部だけ僅かに凹ませる。胎土は緻密で白色。釉は青色を帯びた透明釉で貫入する。高台脇より下部は露胎。

SD72（Fig.42　PL.22）

土師器坏・台付碗、陶器小碗・壺・鉢、青磁碗、白磁碗が出土。**146** は肥前の施釉陶器の小碗もしくは小鉢で、口縁部を欠く。丸味を呈する腰部から胴部で内反する。胎土は緻密で薄い褐色。胴部より上部を褐釉で彩り、失透釉を器面に施す。18 世紀前半。**370** は小石原と考えられる陶器の壺もしくは甕。18 世紀前後～幕末。

（2）井戸（ＳＥ）

SE07（PL.22）

土師器鉢、白磁碗・小皿が出土。

SE09（PL.22）

土師器坏・小皿・台付皿、朝鮮陶器碗、須恵器甕、陶器甕、青磁碗、白磁碗、石鏃、平瓦が出土。**98** は朝鮮の青灰釉陶器碗で、口縁部を欠く。胎土は 0.5㎜ほどの砂粒を多く含み、青灰色を帯びた透明釉を器面全体に施し、畳付の釉を拭き取る。畳付と見込みに粗砂の目跡が残る。16 世紀後半。平瓦は中国浙江省産平瓦と国産平瓦がある。**10009** は玄武岩製の凹基無茎の打製石鏃。全長 2cm・推定幅 1.6cm・最大厚 2.5㎜。

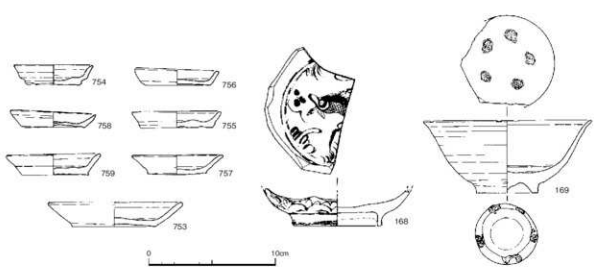


Fig. 40　SD61出土遺物実測図（1/3）

Fig. 41　SD69出土遺物実測図（1/3）

Fig. 42　SD72出土遺物実測図（1/3）

SE10

土師器坏・小皿・鉢、青磁碗、白磁碗・皿、陶器鉢、施釉陶器壺、瓦質土器椀、平瓦、石鍋、銅銭が出土。平瓦は中国浙江省産瓦で、12世紀後半～13世紀中頃。**30005**は中国・北宋の銅銭「祥符通寶（真書体）」。

SE12

土師器坏・小皿・すり鉢、青磁碗、白磁碗、青白磁碗、施釉陶器碗・鉢が出土。**102**は朝鮮の青灰釉陶器碗。ガラス成分が残ず、白泥掛けの器面を呈する。**105**は肥前の白磁碗。17世紀後半。

SE24（Fig.43　PL.22）

土師器碗・坏・小皿・台付皿・鉢、青磁碗・皿、白磁碗・皿、陶器台付皿・鉢、施釉陶器壺・盤、瓦質土器碗、丸瓦・平瓦が出土。丸瓦・平瓦は中国浙江省産の平瓦で、いずれも12世紀後半～13世紀中頃。**760**～**762**は土師器の坏と小皿で、底部に糸切り離し痕跡を残す。**266**は中国・福建の青磁小碗。12世紀後半か。**763**は中国・宋代の草花文軒丸瓦。

SE29（Fig.43）

土師器坏・小皿・鍋・鉢、青磁碗・皿、白磁皿・蓋、染付碗、瓦質土器碗、陶器鉢、施釉陶器壺、須恵器鉢・台付皿、加工木製品が出土。**764**・**765**の土師小皿は、底部に糸切り離し痕跡が残る。**274**は中国・福建の白磁皿。12世紀中頃～12世紀後半。高台内面に墨書。**275**は中国・福建の白磁口禿げ皿。灯明皿で使用。

SE34（Fig.43）

土師器碗・坏・小皿・台付小皿・高坏・鍋・鉢、青磁碗・皿・壺、白磁碗・小皿、陶器鉢、施釉陶器台付皿・鉢・盤、平瓦・塼、滑石製品が出土。**279**は中国・福建の白磁碗。12世紀。**119**は施釉陶器の台付皿。腰部縁の波状紋は指ひねり。胎土は暗青灰色を呈し、緻密。白泥土を化粧掛けし、黒褐釉で彩る。その後に灰釉を施す。平瓦は中国浙江省産の瓦で、12世紀後半～13世紀中頃。**10008**は花崗岩製石臼の下臼片。石材は長石が薄いピンク色を呈し、黒色砂粒を多く含む。

SE39（Fig.43･63　PL.22）

土師器坏・小皿、瓦質土器碗、青磁碗・小壺、白磁椀・皿、染付碗・皿・瓶・猪口、施釉陶器甕・壺が出土。**767**は土師器の小型灯明皿。口径6.1cm・器高1.8cm・底径4.5cmを測る。口縁端部の1箇所に煤が付着する。底部に糸切り離し痕跡が残る。**768**は土師器皿、底部に糸切り離し痕跡が残る。**122**は中国・景徳鎮の碁笥底皿の底部片。胎土は白色で緻密。釉は青味を帯びた透明釉。16世紀前半～中頃。**292**は中国・福建の白磁皿。12世紀。

SE40（Fig.43）

土師器坏・小皿・台付皿・鉢、青磁碗・皿、白磁椀・小碗、青白磁合子蓋・小碗、瓦質土器碗、陶器すり鉢・甕、施釉陶器鉢・碗、平瓦、銅銭が出土。**769**は土師器小皿で、底部に糸切り離し痕跡を残す。**296**は中国・福建もしくは徳化系統の青白磁小碗。13世紀後半～14世紀前半。平瓦は中国浙江省産瓦で、12世紀後半～13世紀中頃。**30008**は中国・北宋の銅銭「治平元寶（篆書体）」。

SE41（Fig.43）

土師器坏・皿・台付大皿・椀・鍋、青磁碗、白磁椀、瓦質土器碗・鉢、陶器すり鉢・鉢、施釉陶器甕が出土。**770**～**773**は土師器の小皿と台付小皿。底部の切り離しはヘラ切りの可能性が高い。

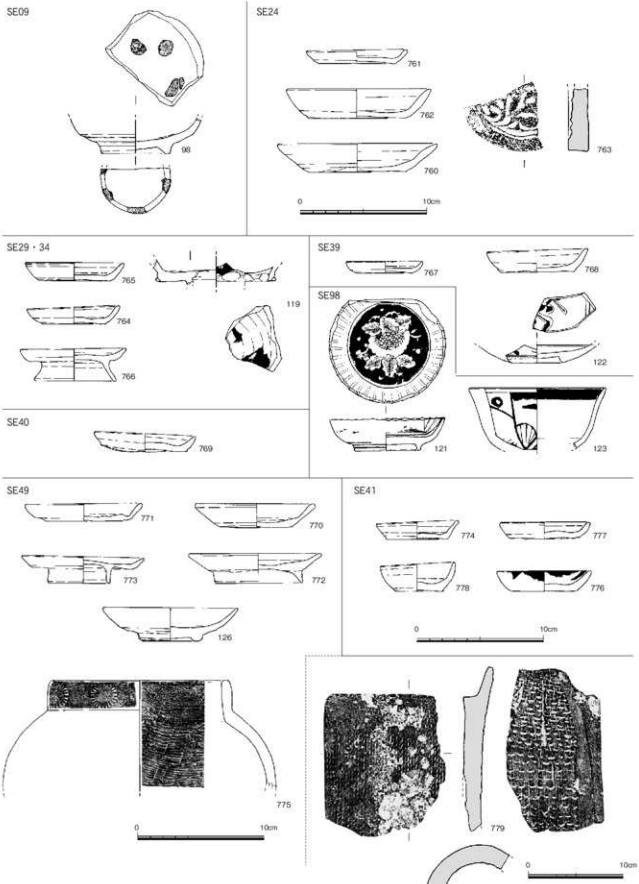


Fig. 43　SE出土遺物実測図① (1/3・1/4)

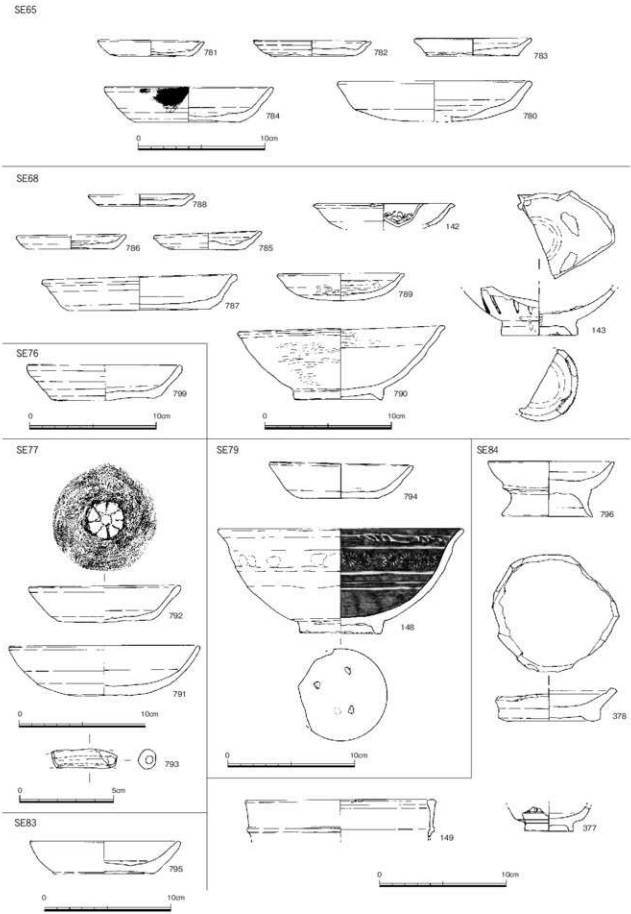


Fig. 44　SE出土遺物実測図②（1/2・1/3）

SE49（Fig.43　PL.23）

土師器坏・小皿・台付皿・鍋・鉢・湯釜、瓦質土器碗・鉢・すり鉢・釜・壺、青磁碗・皿・鉢、白磁碗・高台付皿、陶器碗・壺・すり鉢・鍋、施釉陶器壺・鉢、丸瓦・平瓦・塼が出土。**774**・**776**・**777** は土師器の小皿で、**776** の口縁端部周縁には煤が付着。**778** は土師器のミニチュア碗。いずれも底部に糸切り離し痕跡が残る。**126** は白磁の皿。内湾する口縁端部は角張り、端面幅は 2.5㎜。復元口径 10.7cm・器高 2.7cm・高台径 5.0cm。胎土は緻密で白色。白泥釉は高台を除く器面全体に施す。**775** は瓦質土器の湯釜で底部を欠く。肩から胴部は丸味を呈し、球状を想定させる。口縁は短く直立し、口縁端部は角張り面を呈する。外面は磨き調整、内面は刷毛目が残る。口縁部外周にはスタンプによる菊花文が廻る。胎土は緻密。外面胴部下に煤が付着。**779** は玉縁型の丸瓦で、砲弾形の型に粘土板を巻付け、二分割。凹面に布目を残し、凸面には整形時の縄目が一部に残る。中世末～近世。

SE57（PL.23）

土師器坏・小皿・台付大皿、青磁碗、白磁碗、瓦質土器すり鉢、朝鮮白磁皿、染付碗・蓋、陶器すり鉢、施釉陶器湯釜・鉢・壺、熨斗瓦が出土。**340** は朝鮮・白磁皿。高台内は低い兜巾。緑色を帯びた透明釉を器面全面に施す。高台と見込みに目跡。16 世紀。**342** は陶器すり鉢。内面全体に 15 本歯の櫛ですり目を放射状に施す。底部外面に糸切り痕跡。

SE65（Fig.44）

土師器碗・坏・小皿・台付皿・壺・甕・鉢、青磁碗・皿、白磁碗・皿・合子、陶器甕・台付坏、施釉陶器甕・鉢・壺、瓦質土器碗・鉢、丸瓦・平瓦が出土。**781**～**783** は土師の小皿。いずれも底部に糸切り離し痕跡が残る。**780**・**784** は土師器の坏。**784** は口縁の一部に炭化物（煤か）が付着。いずれも底部に糸切り離し痕跡。出土土師器の坏・小皿の一部には底部にヘラ切り離し痕跡が残る。丸瓦・平瓦は中国浙江省産の平瓦で、いずれも 12 世紀後半～13 世紀中頃。

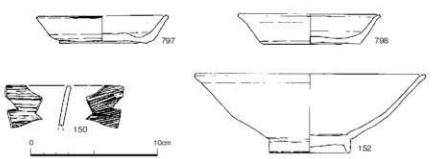


Fig. 45　SE85出土遺物実測図（1/3）

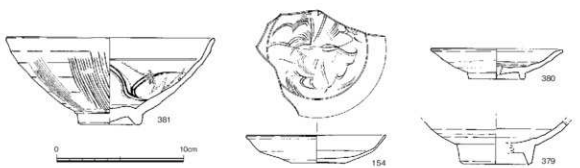


Fig. 46　SE88出土遺物実測図（1/3）

SE68（Fig.44　PL.23）

土師器坏・小皿、瓦質土器碗・鉢・甕、白磁碗・皿・高台付皿、高麗青磁皿・碗、陶器甕・すり鉢・壺、施釉陶器碗、曲物が出土。**785**～**788**は土師器の小皿と坏。いずれも底部に糸切り離し痕跡。未掲載の一部の土師器坏・小皿には、底部にヘラ切り離し痕跡。**789**が瓦質土器の小皿。底部は丸味を呈する。復元口径9.8cm・器高2.1cm・底径3.6cm。内外面とも雑な磨き。胎土は緻密で暗灰色。**790**は瓦質土器の碗。口径15.3cm・器高5.6cm・高台径7.1cm。器面の磨きは粗い。**364**は中国・福建の白磁高台付皿。11世紀後半～12世紀前半。**142**は高麗青磁の印花皿。口縁は内湾気味で、端部は外側を摘み出して嘴状。内面に草花文の型押し。胎土は緻密で暗灰色～茶褐色。釉は白色土釉で薄い。**143**は高麗青磁の碗で、口縁部を欠く。見込みには径3.5cmほどの茶溜り。外面には幅広のヘラによる蓮弁文が高台脇から口縁にかけて描く。高台と見込みには微細な砂目跡が残る。胎土は緻密で暗青灰色。緑灰色釉を器面全体に施した後、畳付の釉を拭き取る。**10024**は滑石製の石鍋片。外面の口縁部下には断面が台形状に張り出す凸帯が廻る。いわゆる鍔付石鍋。鍔は幅1.7cm・基部厚1.6cm・先端厚0.8cm。口縁端部まで煤が付着。口縁部以外の外周面には破面が残る。

SE76（Fig.44･62）

土師器坏・小皿・鍋、青磁碗・小碗・皿、白磁皿、瓦質土器鉢、陶器鉢、施釉陶器鉢・壺、瓦、滑石製品が出土。**799**は土師器の坏で、口径11.7cm・器高2.6cm・底径8.2cmを測る。口縁部と内面に広く煤が付着。底部に糸切り離し痕跡。**371**は中国・福建の白磁口禿げ皿。13世紀後半～14世紀前半。**10033**は中央部が抉れた円盤状の滑石製品。片面は滑らか。最大径4.9cm・厚1.6cm。

SE77（Fig.44･62　PL.23）

土師器坏・小皿・碗、青磁碗・皿、白磁碗、陶器合子・壺、施釉陶器盤、瓦質土器碗・皿、平瓦、滑石製人形・硯形が出土。**791**は土師器坏で底部は丸味。復元口径14.7cm・器高4.3cm・底径5.6cm。**792**は土師器坏で、内面底央に型押しによる8弁の花文を施す。口径11.9cm・器高2.8cm・底径8.2cm。底部に糸切り離し痕跡。**793**は土師質の円柱片。小型土錘と思われるが、器面の状況や反りが有ることから、土人形部品の可能性も残る。平瓦は中国浙江省産瓦で、12世紀後半～13世紀中頃。**373**は中国・龍泉窯の青磁鎬蓮弁碗。13世紀後半～14世紀前半。**10010**は扁平な直方体の滑石の横口両面に人の顔を彫ったもの。石材は石鍋の口縁部外縁の4箇所に箱状突起の把手を縦長に削り出した、いわゆる縦長の耳を持つ古形態の滑石製石鍋の耳部（把手）破片を転用したもの。縦4.9cm・横2.1cm・幅2.8cm。目・鼻・口を陽刻し、特に歯の形を鮮明にする。顔の向きが裏面と表面では天地逆。広口面は破面を残して未調整であることから、鍋の縦長の耳（把手）幅が4.9cmであることを知る。**10034**は滑石製の小型の硯で、古形態に属する滑石製石鍋の耳（把手）部分の破片を転用したもの。縦長の耳（把手）は撥形で縦4.8cm・横1.8～2.3cm・幅5.2cm。石材の広口面を彫って海と陸とを形作る。裏面に当たる一方の広口面にも硯を彫る目安の線刻が残る。横口面には「友？」の線刻。

SE79（Fig.44　PL.24）

土師器碗・坏・小皿・鉢・すり鉢、青磁碗・皿・合子、白磁小皿・碗、青磁象嵌碗、陶器甕・壺、施釉陶器壺・甕、瓦質土器火舎・湯釜、平瓦、木製椀・曲物・折敷・猪口が出土。**794**は土師器坏で、口径11.2cm・器高2.4cm・底径6.5cm。底部に糸切り離し痕跡。**148**は大型の青磁象嵌碗で、高台脇から口縁の半分ほどを欠く。内湾気味に体部は立ち上がり、口縁は外湾気味に短く反る。復元口径19.0cm・器高8.1cm・高台径6.5cm。高台を輪高台に削り出し、腰部まで削り整形。内面体部中位には型押しの菊花文。その下位にはヘラで断面形を三角形に彫った三重の圏線を廻らし、凹み部分に白色土を埋め込む。菊花文と口縁端部との間にも三重の圏線を廻らし、口縁端部から一番目と二番目の

圏線の間を変形雷門？で飾る。ただ、圏線の幅は一定ではなく、菊花文の配置も高さや間隔が一定ではなく、雑に感じられる。胎土は緻密で灰色。小豆ほどの目跡が見込みに残る。僅かに緑色を帯びた濁釉（濁オリーブ色釉）を器面全体に薄く掛ける。14世紀後半～15世紀前半。平瓦は中国浙江省産瓦で、12世紀後半～13世紀中頃。

SE82

土師器坏・小皿・台付大皿・鍋・鉢・すり鉢・甕、青磁碗・皿、白磁碗・皿、瓦質土器火舎・すり鉢、陶器甕・鉢・すり鉢、施釉陶器甕、丸瓦、曲物・加工木製品が出土。丸瓦は中国浙江省産瓦で、12世紀後半～13世紀中頃。

SE83（Fig.44・63）

土師器坏・小皿・碗・台付皿・鉢、白磁小皿・皿、陶器すり鉢・甕・壺、瓦質土器碗、銅銭が出土。795は土師器坏で、口径11.4cm・器高2.7cm・底径7.9cm。底部に糸切り離し痕跡。**30009**は中国・北宋の銅銭「元豊通寶（篆書体）」。

SE84（Fig.44）

土師器坏・小皿・台付大皿・鉢・鍋、青磁碗・小皿、白磁碗・小皿・合子、染付小碗、陶器甕、施釉陶器壺・碗・鉢・甕、天目茶碗、瓦質土器碗・鉢・湯釜、平瓦、曲物が出土。**796**は土師器台付の小皿。糸切り離しの底部に裾広がりの台を貼り付ける。**378**は白磁碗の底部を円盤状に打ち欠いたもの。見込みの釉は僅かに褐色を帯びた失透釉で、貫入する。高台脇以下は露胎。**377**は染付の碗で、口縁部を欠く。畳付は釉を掻き取り露胎。**149**は施釉陶器鉢で、体部以下を欠く。口縁端部を肥厚させ、外面口縁端部下に凸帯を廻らす。濁褐色釉を口縁部に施す。

SE85（Fig.45　PL.24）

土師器坏・小皿・碗・すり鉢・鉢、青磁碗、白磁碗・皿が出土。**797**・**798**は土師器の坏で、底部に糸切り離し痕跡。**797**は内面全体が黒色化し、墨皿としての使用か。**152**は**153**と同一固体と思われる中国・福建の白磁碗で、口縁部を欠く。胎土は緻密で、薄い灰褐色。極めて薄い緑色を帯びた透明釉を器面全体に施す。内外面とも細かい貫入。12世紀後半。**150**は朝鮮の刷毛目粉青沙器の碗で、底部を欠く。口縁は外反しながら直線的に立ち、口縁端部は丸い。胎土は0.2～0.5㎜ほどの砂粒を多く含み、暗青灰色。釉は透明。平瓦は、中国浙江省産瓦で12世紀後半～13世紀中頃のものと国産で凸面に斜格子叩き目が残るものとがある。

SE88（Fig.46）

土師器坏・小皿・大皿、青磁碗、白磁碗・皿、青白磁皿、瓦質土器碗、陶器甕・盤が出土。**381**は中国・同安窯の青磁碗で、口径16.2cm・器高6.8cm・高台径4.8cm。底部から内湾気味に立ち上がる。**154**は中国・景徳鎮の青白磁皿。復元口径10.9cm・器高2.2cm・底径3.9cm。胎土は緻密で白色。器壁は全体的に薄く、釉を含めて体部～口縁部で1.5～2㎜、底部で3.5㎜。青色を帯びた透明釉を器面全体に施し、底部の畳付の釉を削り取る。12世紀初～前半。**380**は中国・福建の白磁皿。見込みの釉を輪状に掻き取る。12世紀中頃～後半。**379**は中国・福建の白磁碗。胎土は緻密で灰白色。見込みの釉を輪状に掻き取るが、梅花皮状。12世紀前半～後半。**10025**は砂岩の玉。最大径3.6cm。

（3）土坑（SK）

SK02（Fig.47・48　PL.24）

土師器小皿・坏・台付坏・台付皿・鍋、青磁碗・皿、白磁碗・八角形坏、青磁碗・小碗・皿、施釉陶器水注、陶器甕・鉢・壺・すり鉢、施釉陶器水注・壺・鉢、瓦器碗・鉢、平瓦、下駄が出土。

Fig.47の資料は**459**を除けば全て土師器小皿と坏で、底部に糸切り離し痕跡。**459**は瓦質土器碗で、復元口径17.6cm・器高6.7cm・高台径6.7cm。胎土は灰色で僅かに白色砂粒を含む。内面だけヘラ磨き。**191**・**192**は白磁碗。**91**は白磁の角坏で、口縁部を欠く。高台脇から口縁部の外面を八角形に削り、透明釉を施す。切高台の高台は、輪高台に整形した後、4ヵ所をアーチ状にヘラで挟る様に削り、脚的畳付を狭い4点とする。同様な白磁角杯がSD05から出土。**192**は中国・同安窯の青磁皿で底部を欠く。**183**・**194**～**197**は中国・龍泉窯の青磁碗と小碗。**197**は他と比べて釉が極めて青味が強い。**193**は中国・龍泉窯の青磁碗。見込み中央に吉祥句を型押し。圏線内側には方形に劃した界線内に「金玉満堂」。圏線と方界線との間には唐草文。**184**・**186**・**188**・**189**は中国・同安窯の青磁碗。釉はオリーブ色。**198**は中国の陶器壺。口縁は「く」字状に外反。口縁部内側に白色土の目跡。器面全体に灰釉を薄く施す。**187**は中国・施釉陶器鉢の底部片。碁笥底の底部から胴部は直線的に外反しながら立ち上がる。胎土は緻密で灰褐色～灰色。器面内外面には僅かに緑色を帯びた白泥釉を施す。13世紀。**199**は中国・福建の施釉陶器すり鉢で底部を欠く。底部からやや内碗気味に外反して立ち上がる体部

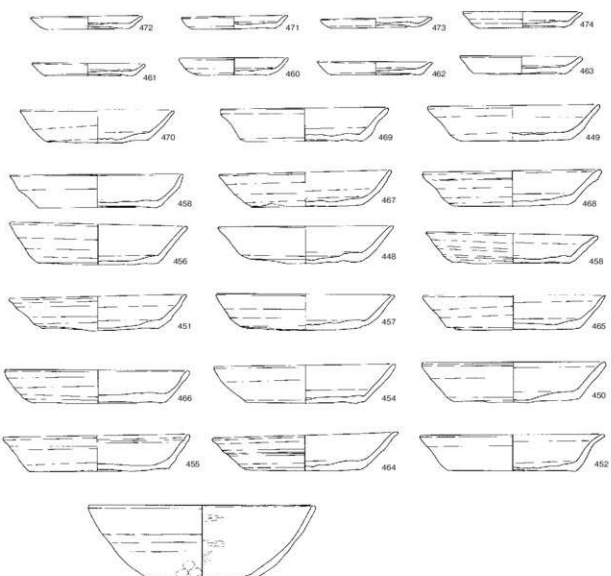


Fig. 47　SK02出土遺物実測図①（1/3）

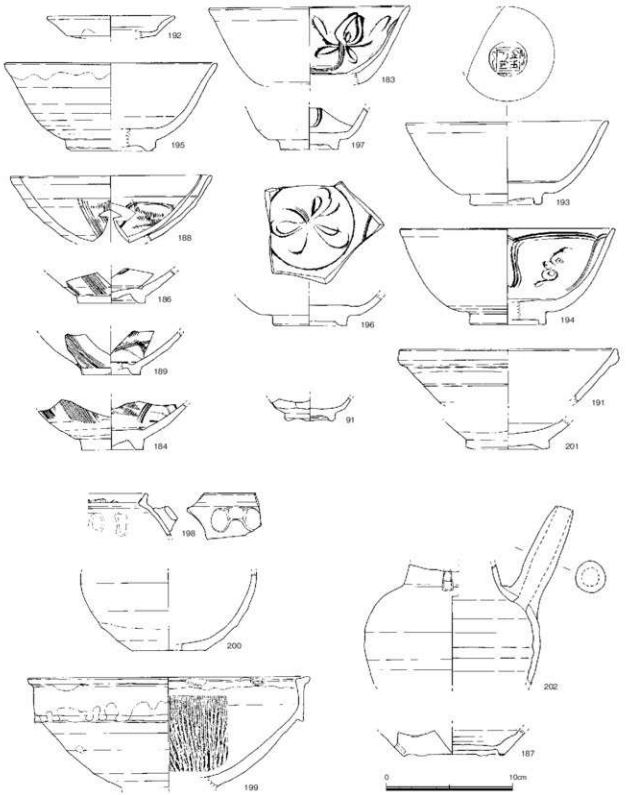


Fig. 48　SK02出土遺物実測図②（1/3）

に続く口縁部は、折り返して肥厚させ、端部外縁は嘴状。外面底部近くはヘラ削り調整。胎土は緻密で茶褐色。すり目は、7～8本歯の櫛で内面底から口縁端部近くまでの器面全体に隙間なく施す。摺目を入れる作業は４工程で、最初に口縁部付近に廻らし、続いて体部、底部近く、最後に底面と移る。摺目１本の溝幅は0.8～1㎜、深さ0.4～0.7㎜を測り、隣り合う櫛目の間隔は3㎜を測る。口縁部に黒褐釉。12世紀後半～13世紀前半。**200・202**は中国産の褐釉陶器の水注。胎土は緻密で茶褐色。釉は黒褐色で、内面と外面の底部脇まで施す。13世紀前半。**200**の底部は平坦で、底部脇はヘラ削り。**202**の頸部には吊り手の耳が付く。注口は肩部を穿孔して円筒を差し込み接合。平瓦は中国浙江省産瓦で、12世紀後半～13世紀中頃。

SK03（Fig.49　PL.25）

土師器小皿・坏・鉢、青磁碗・皿、白磁碗・皿、施釉陶器壺、瓦質土器碗・鉢、丸瓦、石製品が出土。**482～485**は土師器の小皿で、総じて器高が低い特徴を持つ。全ての底部に糸切り離し痕跡。**476～481**は土師器の坏で、全ての底部に糸切り離し痕跡。**203～205**は中国・同安窯の青磁碗と皿。**206**は中国・龍泉窯の青磁碗。**475**は国産の玉縁式丸瓦。中世。**10019**は碧石状の石製品。長径1.6㎝・短径1.4㎝・最大厚0.6㎝を測る。

SK06（Fig.50･63）

土師器坏・小皿・台付小皿・すり鉢・鍋、青磁碗、白磁碗・皿、施釉陶器碗・皿・壺・盤、陶器鉢・すり鉢・壺、瓦質土器すり鉢、銅銭が出土。Fig.50の上段は土師器の小皿と坏で、全ての底部に糸切り離し痕跡。**96**は朝鮮・青灰釉陶器の碗で口縁部を欠く。高台の削り出しはシャープさを無き、内面はすり鉢状。畳付と見込みに白色土の目跡を残す。胎土は緻密で青灰色。**97**は朝鮮・青灰釉陶器の皿で口縁部を欠く。畳付と見込みに小豆大ほどの白色土の目跡を残す。胎土は緻密で灰褐色～青灰色。16世紀後半。**30004**は中国・北宋の銅銭「紹聖元寶（真書体）」。**10020**は砂岩製の円盤。

SK08（Fig.51　PL.25）

土師器坏・小皿・台付小皿・鉢・鍋、瓦器椀、青磁碗・皿、白磁碗・皿、陶器すり鉢、施釉陶器すり鉢・甕、須恵器坏・甕、平瓦が出土。**522**は土師器台付小皿。口径9.5㎝・器高2.2㎝・台径6.3㎝を測る。**523**は瓦質土器碗。口径15.8㎝・器高4.7㎝・高台径7.3㎝。高台内に墨書。内面のヘラ磨きを丁寧に施す。

SK17（Fig.53）

土師器坏・小皿・すり鉢、青磁碗、染付碗・茶碗・鉢、瓦器蓋、施釉陶器甕・壺・盤・水注・碗、陶器鉢、軒先丸瓦が出土。**534**は土師質の蓋。口縁外縁に鍔が廻り、中央部に摘みが付く。器面の大半が黒色。**220**は肥前・染付小碗。外面には中国風の童子が踊る姿。1820年～1860年

SK26（Fig.54　PL.25）

土師器坏・小皿・大型鉢・鍋、青磁碗・皿、白磁碗、青白磁合子蓋・皿、陶器鉢、施釉陶器鉢・壺、瓦質土器甕・碗・鉢、丸瓦・平瓦・塼、滑石製品が出土。**800～802**は土師器の坏・小皿・台付皿で、全ての底部に糸切り離し痕跡。**619・803**は土師器の丸底鉢で土鍋として使用。**619**は口縁端部外縁に粘土紐を巻きつけ、外方へ嘴状に張り出す。幅2㎝の鍔が廻る形である。口縁端面には径1.5～2㎜ほどの太い糸を経糸にした平織り布の圧痕が残る。内外面とも刷毛目整形。口径48.8㎝・復元器高19.2㎝。胎土は0.5～2㎜ほどの長石・石英砂粒を多く含む。外面には全域で煤が付着。**803**も口縁端部外縁に粘土紐を巻き付け、外方へ嘴状に張り出させる。幅1.5～1.7㎝を測る鍔が廻る形である。口縁端面の一部には径1.5～2㎜ほどの糸を経糸にした平織り布の圧痕が残るが、大半はナデ消し。内外面とも刷毛目整形の後にナデ調整を全域に施す。口径39㎝・復元器高14.2㎝。胎土は0.5～2㎜ほ

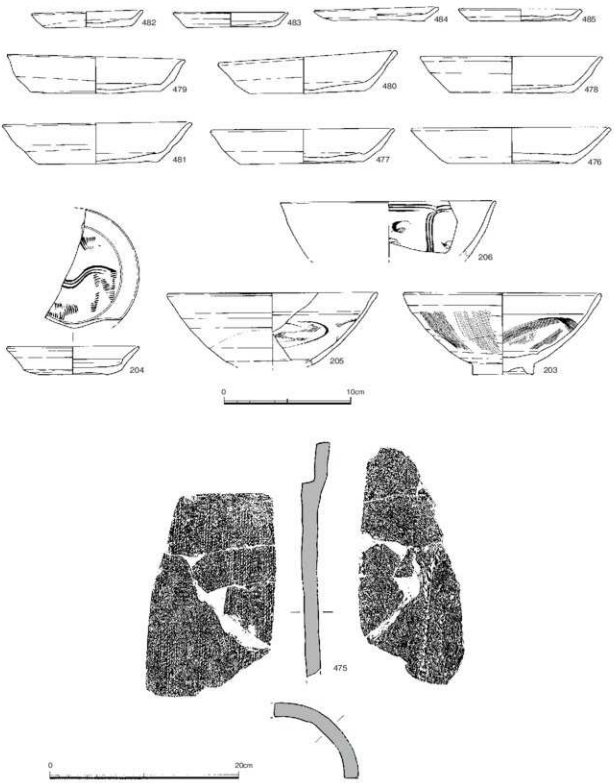


Fig. 49　SK03出土遺物実測図 (1/3・1/4)

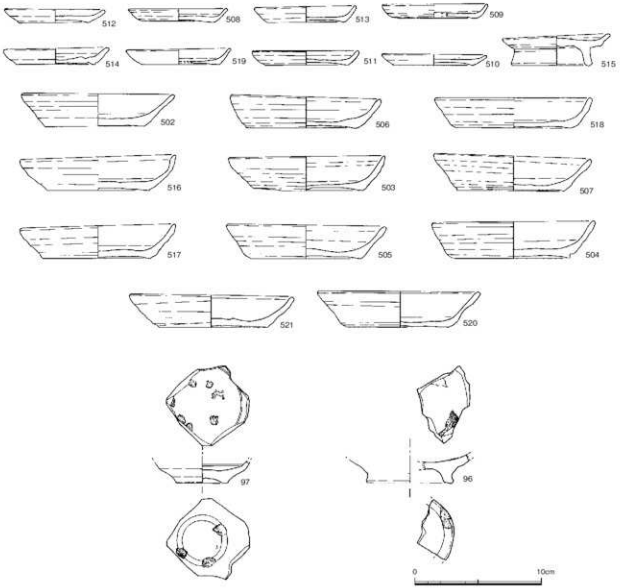


Fig. 50　SK06出土遺物実測図 (1/3)

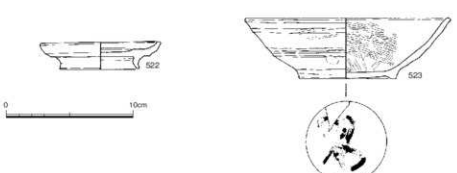


Fig. 51　SK08出土遺物実測図 (1/3)

どの長石・石英砂粒を多く含む。外面は口縁端部まで煤が付着し、器面剥離が激しい。丸瓦・平瓦は中国浙江省産で、いずれも 12 世紀後半～13 世紀中頃。**10021** は滑石製石鍋の転用品。口縁部下に断面形が台形状の凸帯の鍔を廻らした鍔付石鍋の口縁部片を長方形状に加工したものである。鍔の凸帯を粗く削るが、基部を残す。外周面は口縁端部を除く 3 辺は 2 次加工を受けているが、2 辺は破面を一部に残す。残りの 1 面は削りで滑らかなで内縁に加工の計画線を刻んだ線を残す。鍔まで煤が付着していたのを削って取り除く。最大縦 9.1cm・最大横 12.5cm・厚 1.2cm。鍔は基部で 1.6cm を測る。

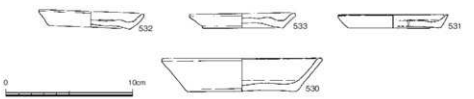


Fig. 52　SK14出土遺物実測図 (1/3)

Fig. 53　SK17出土遺物実測図 (1/3)

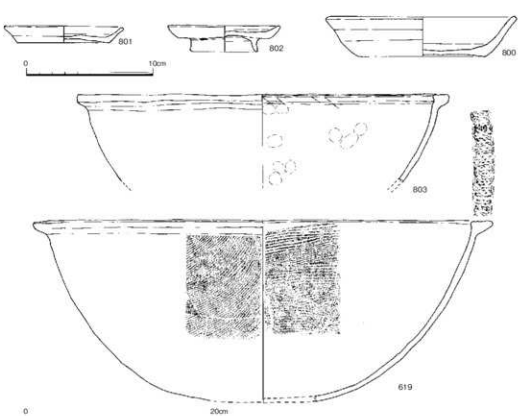


Fig. 54　SK26出土遺物実測図 (1/3・1/4)

SK28（Fig.55　PL.26）

土師器坏・小皿・台付坏、青磁碗、白磁皿、染付皿、陶器甕、須恵器坏身・甕、瓦質土器碗、滑石製品が出土。Fig.55は土師器の小皿と坏で、全ての底部に糸切り離し痕跡を残す。完形品が大半である。**10022**は滑石製石鍋の口縁部片で底部を欠く。外面の口縁部下に断面が台形状に張り出す凸帯を廻らした、いわゆる鍔付石鍋。鍔は幅1.4cm・基部厚1.8cm・先端厚0.9cm。鍔の先端面まで煤が付着する。破片には破面が残る。

SK30（Fig.56）

土師器坏・小皿・鉢、瓦質土器碗、青磁碗、白磁碗、平瓦が出土。**804**は土師器の坏で、口縁が外反しながら立ち上がり、底部に糸切り離し痕跡を残す。平瓦は中国浙江省産瓦で、12世紀後半～13世紀中頃。

SK31（Fig.57）

土師器坏・小皿・台付坏・鍋・甕、青磁碗、白磁碗・皿、陶器すり鉢・鉢、須恵器坏身、瓦質土器碗、丸瓦・平瓦が出土。丸瓦・平瓦は中国浙江省産で、いずれも12世紀後半～13世紀中頃。**115**は中国・同安窯の青磁碗。釉の発色が悪く、灰褐色を呈する。外面は飛び鉋風。

SK33（Fig.58）

土師器坏・小皿・鍋・すり鉢・鉢、青磁碗・皿、白磁碗・皿・小碗、染付碗・皿、陶器甕、施釉陶器盤・壺、須恵器坏身、瓦質土器碗・台付皿・すり鉢・火舎、平瓦が出土。Fig.58の土師器坏・小皿は、全ての底部に糸切り離し痕跡を残す。**116**は中国・景徳鎮の染付碗もしくは皿の高台部分。胎土は緻密で乳灰色。呉須の発色は良い。釉は青色を帯びた透明釉。16世紀前半～中頃。**117**は中国・漳州窯の小皿で底部を欠く。呉須の発色は悪い。16世紀後半。**118**は肥前系の染付皿。釉は濁り、呉須の発色も悪い。18世紀後半～19世紀初頭。平瓦は中国浙江省産で、12世紀後半～13世紀中頃。

SK38（Fig.59　PL.26）

土師器坏・小皿・台付皿・鍋・すり鉢・鉢、青磁碗・小碗・皿、白磁碗・皿、天目茶碗、施釉陶器壺・水注・鉢・盤・天目茶碗、陶器鉢・甕、丸瓦・平瓦、砥石が出土。**820・821**は土師器の坏と小皿は底部に糸切り離し痕跡。**284**は中国・龍泉窯の青磁碗で高台内に墨書。**288**は中国・福建の白磁碗。12世紀中頃～後半。**281**は中国の施釉陶器鉢。13世紀。**285**は中国・建窯？の黒釉天目茶碗。12世紀後半～13世紀。**10023**は滑石製石鍋の口縁部片で底部を欠く。外面の口縁部下に断面が台形状に張り出す凸帯を廻らす。いわゆる鍔付石鍋。鍔は幅1.6cm・先端厚0.6cm・基部厚1.4cm。鍔の上面まで煤が付着し、口縁部以外の外周面には破面が残る。鍔の上面基部には径1cmの穴を穿っている。丸瓦・平瓦は中国浙江省産で、いずれも12世紀後半～13世紀中頃。

SK45

土師器坏・小皿・鍋・台付大皿、青磁碗・皿、白磁碗・合子・皿、瓦質土器碗、平瓦が出土。平瓦は中国浙江省産で、12世紀後半～13世紀中頃。

SK48

土師器坏・小皿、青磁碗、白磁碗・皿、瓦質土器碗、平瓦が出土。平瓦は中国浙江省産で、12世紀後半～13世紀中頃。

SK50（Fig.59）

土師器坏・小皿、白磁碗、瓦質土器碗・丸瓦が出土。**822～824**は土師器の坏と小皿。底部に糸切り離し痕跡。**825**は瓦質土器の碗で硬質。口縁端部はシャープに尖る。内面の磨きは密で丁寧な仕上げ。暗灰色の胎土は僅かに0.5～1㎜ほどの長石・石英砂粒を含む。

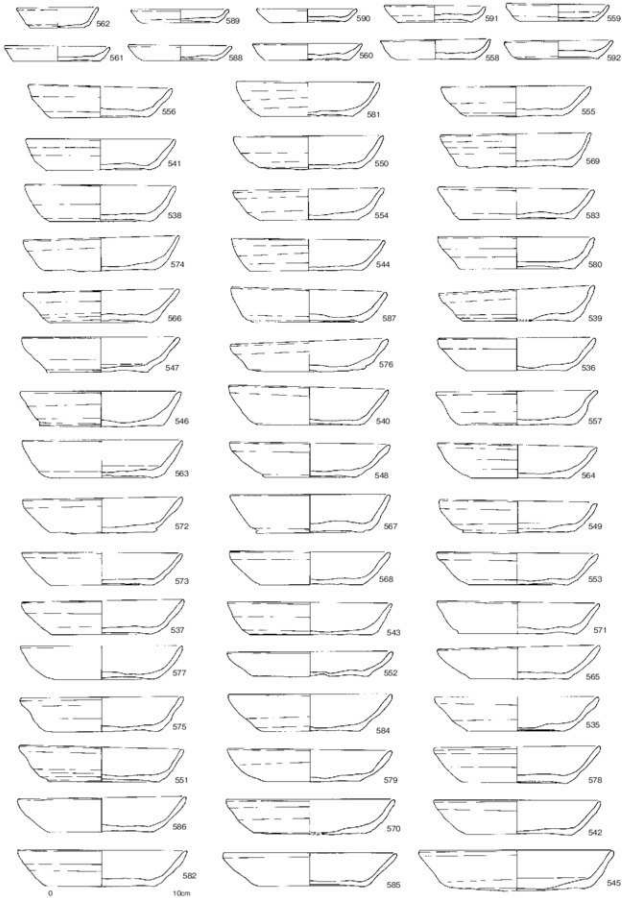


Fig. 55　SK28出土遺物実測図 (1/3)

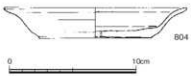


Fig. 56　SK30出土遺物実測図 (1/3)

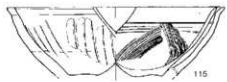


Fig. 57　SK31出土遺物実測図 (1/3)

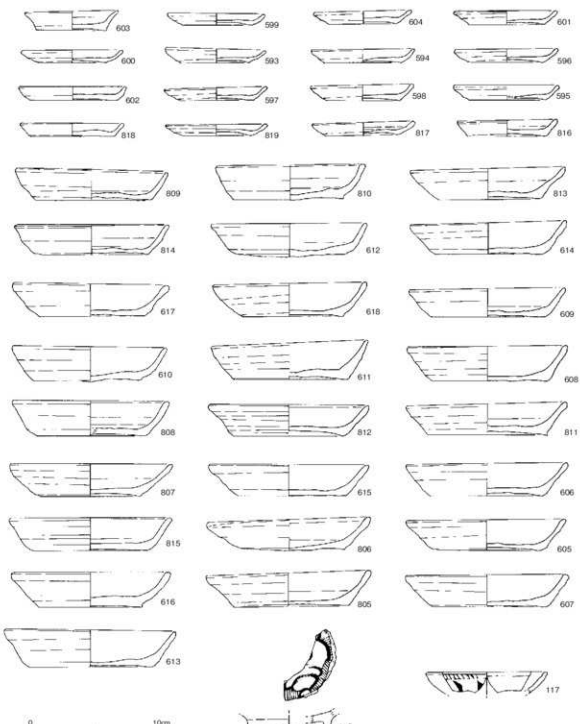


Fig. 58　SK33出土遺物実測図 (1/3)

SK52（Fig.59）

土師器坏・小皿、青磁碗・鉢、白磁碗、陶器甕、瓦質土器鉢、小型土錘が出土。**826** は土師質の小型土錘で全長 4.3cm・最大径 1.3cm。平瓦は中国浙江省産で、12 世紀後半～13 世紀中頃。

SK67

土師器坏・小皿、青磁碗、瓦質土器碗、平瓦が出土。平瓦は中国浙江省産で、12 世紀後半～13 世紀中頃。

SK70

土師器坏・小皿・鍋、青磁碗・盤、施釉陶器甕、瓦質土器碗が出土。土師器坏には、底部切り離し痕跡が糸切とヘラ切とがある。

SK71（Fig.59　PL.26）

土師器坏・小皿、青磁碗、白磁皿、施釉陶器壺・盤・鉢、陶器鉢・甕、瓦質土器碗・鉢、丸瓦が出土。**827**～**831** は底部に糸切り離し痕跡を残す土師器小皿。**832** は底部にヘラ切り離し痕跡を残す土師器小皿。**823**・**824** は土師器の小皿。**145** は中国・白磁の皿。高台径 3.9cm。釉は白色の透明釉で、高台脇まで施し、貫入。胎土は緻密で乳灰色。**367** は中国・磁灶窯の施釉陶器壺。宋代。**368**・**369** は磁灶窯の黄釉鉄絵陶器盤。宋代。

SK75（Fig.59　PL.26）

土師器坏・小皿・碗、青磁碗、白磁碗、陶器鉢、施釉陶器甕、瓦質土器碗・鉢が出土。**835**～**839** は土師器の小皿で、全て底部にヘラ切り離し痕跡を残す。未掲載の一部の土師器坏・小皿には、底部に糸切り離し痕跡。**147** は中国・広東の白磁碗。口縁部は短く内湾し、端部は丸い。見込みは平坦で径 6cmの茶溜まり。口径 15.3cm・器高 5.7cm・高台径 5.9cm。胎土は緻密で乳青灰色。極めて薄い緑色を帯びた失透の灰釉を内面と外面の高台脇まで掛ける。

SK80

土師器坏・小皿・鍋、青磁碗・皿、白磁碗・壺、施釉陶器水注・盤、丸瓦・平瓦が出土。瓦は中国浙江省産で、12 世紀後半～13 世紀中頃。

SK87（Fig.59）

土師器坏・小皿、青磁皿、白磁碗、瓦質土器碗が出土。**840**～**844** は土師器の坏と小皿で、底部に糸切り離し痕跡。未掲載の一部の土師器坏・小皿には、底部にヘラ切り離し痕跡。

SK91（Fig.59）

土師器坏・小皿、青磁碗、白磁碗・皿、青白磁皿、瓦質土器碗が出土。**382** は中国・景徳鎮の青白磁皿。見込みに型押しの花文。胎土は緻密で白色。青味を帯びた透明釉を器面全体に施し、畳付部分の釉を削り取る。12 世紀～13 世紀。

SK93（Fig.59　PL.26）

土師器坏・小皿・鍋、青磁碗、白磁碗、染付小皿、陶器甕、瓦質土器碗・すり鉢、平瓦が出土。

155 は中国・景徳鎮の染付皿。小さい碁笥底を呈し、口縁は内湾気味に立ち上がる。青味を帯びた透明釉を器面全体に施し、畳付の釉を輪状に掻き取る。口径 10.1cm・器高 2.7cm・底径 2.5cm。

（4）柱穴・小穴（SP）

SP01（Fig.60）

391 は中国・同安窯の青磁碗。

SP02（Fig.60）

845 は底部に糸切り離し痕跡を残す土師器小皿。

SP30（Fig.60）

846 は底部に糸切り離し痕跡を残す土師器小皿。

SP114（Fig.60）

847 は底部に糸切り離し痕跡を残す土師器小皿。

SP188（Fig.60　PL.26）

848 は直方体の塼で片方の端部を欠く。胎土は灰色で、1㎜以上の砂粒を多く含まない。表面は燻しによる黒色で、瓦質的。12.4cm・3.8cm・残存長15.8cm。型枠作りと思われる。

SP216（Fig.60）

849・850 は底部に糸切り離し痕跡を残す土師器坏と小皿。

SP242（Fig.63）

銅銭が出土。**30010** は中国・北宋の銅銭「景祐元寶（真書体）」。

SP249（Fig.60）

851 は底部に糸切り離し痕跡を残す土師器小皿。皿の中央部を穿孔する。

SP278（Fig.63）

銅銭が出土。**30011** は中国・北宋の銅銭「威平元寶（真書体）」。

SP400（Fig.60）

852 は底部にヘラ切り離し痕跡を残す土師器坏。

SP439（Fig.60）

853 は底部にヘラ切り離し痕跡を残す土師器小皿。

SP530（Fig.60）

854 は底部に糸切り離し痕跡を残す土師器坏。

（5）その他

遺構検出（Fig.61）

156 は象嵌粉青沙器碗。胎土は緻密で淡青灰色。釉は失透釉で、象嵌の白土色が明瞭な部分と不明瞭な部分とがある。**383** は中国・福建の白磁碗。胎土は緻密で薄い灰褐色。灰色の釉を高台脇まで掛ける。欠けているが碗の高台縁を円盤状に打ち欠いた瓦玉。高台内に花押と思われる墨書。12世紀の前半。**384** は中国・福建の白磁碗。胎土は緻密で乳灰色。施釉後に見込みの釉を輪状に削り取る。釉は灰色釉。12世紀中頃～後半。**385** は中国・福建の白磁碗。胎土は緻密で乳灰色。釉は僅かに青味を帯びた透明釉。宋代。**386** は中国・同安窯の青磁皿。**387・388** は中国・龍泉窯の青磁碗。**389** は白磁系の碗で口縁部を欠く。胎土は緻密で、色調は高台内が薄い灰褐色、その他が灰色。釉は薄い緑色を帯びた透明釉。貫入する。宋代。**390** は中国・広東の白磁の皿。胎土は緻密で白色。釉は僅かに濁る透明釉。11世紀後半～12世紀初。

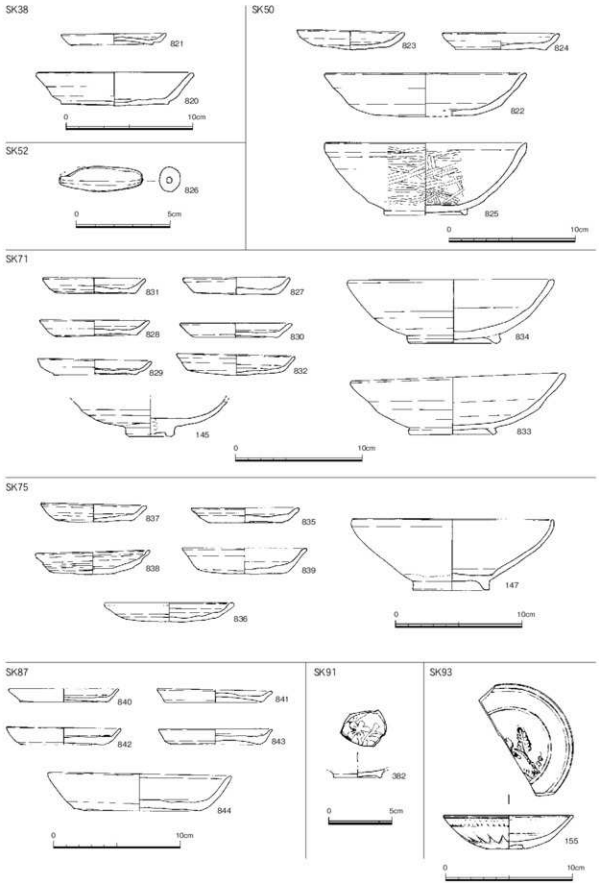


Fig. 59　SK出土遺物実測図 (1/2・1/3)

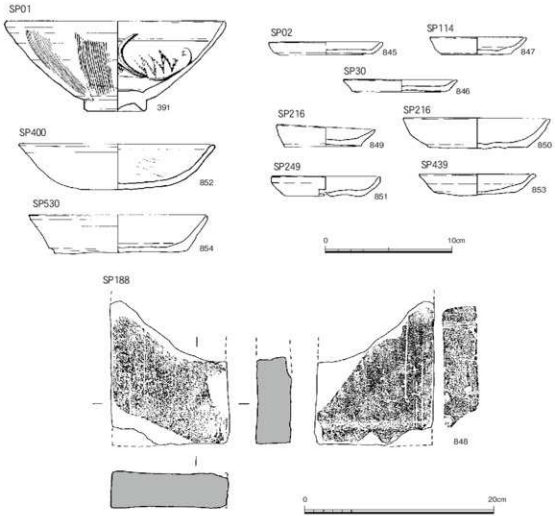


Fig. 60　SP出土遺物実測図（1/3・1/4）

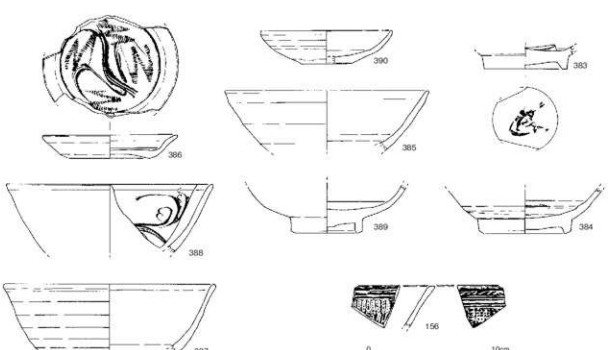


Fig. 61　遺構検出出土遺物実測図（1/3）

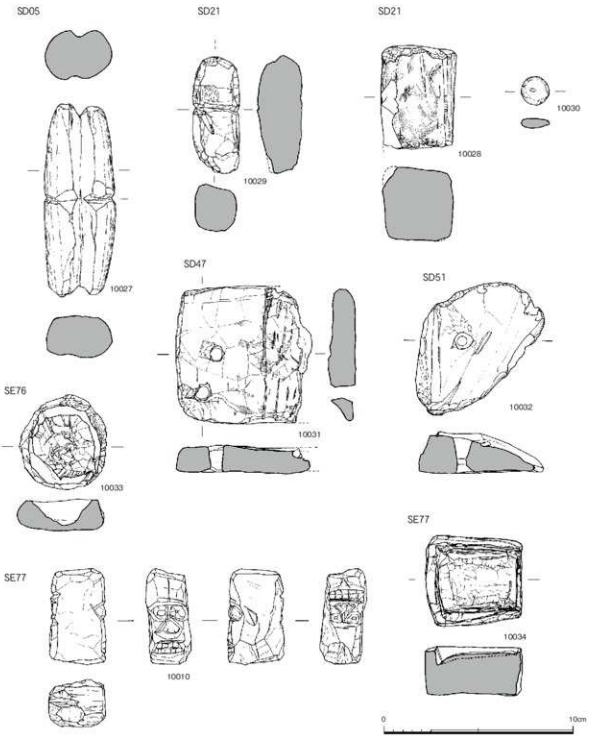


Fig. 62　出土石製品実測図 (1/2)

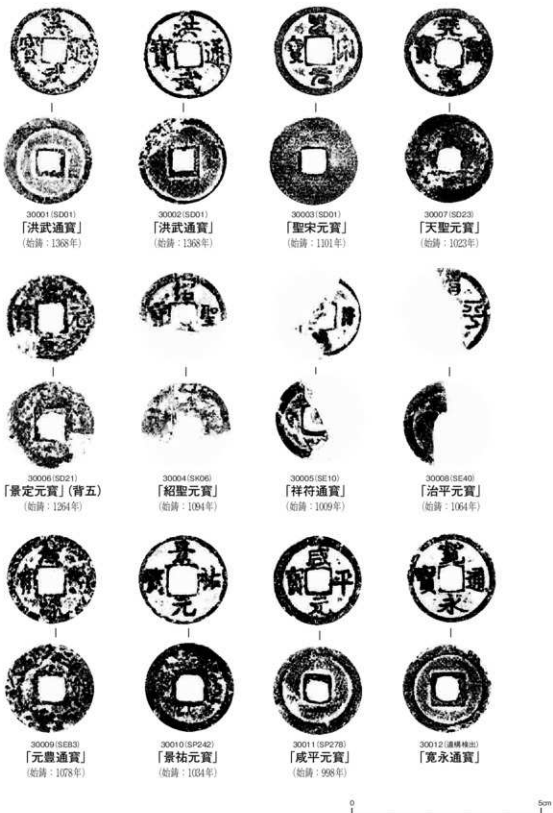


Fig. 63　出土銅銭拓影（1/1）

第Ⅲ章　まとめ

調査地は、住吉神社の北西 150 m、那珂川の東岸に位置する沖積地で標高３mを測る。博多や住吉が現在の地形となる 16 世紀中頃以前、特に中世における調査地は陸地深く湾入したほとりに位置し、北側には西進して那珂川と合流する比恵川の河口が広がり、海外交易拠点都市「博多」とは地理的に劃された状況が絵図から知ることができる。

これまで、筑前國一之宮「住吉神社」の創建が奈良時代まで遡ることが文献記録から知られているが、神社や周辺の歴史的様相および変遷は不明であった。

今回の調査による成果は大きく二つある。ひとつは調査地を含む「住吉」周辺の土地形成が「博多」とは異なることが明らかになった点である。「博多（沖の浜・博多浜）」が潮流で形成された砂丘上に立地するのに対し、「住吉」は比恵川や那珂川により運ばれてきた花崗岩風化土（マサ土）の堆積によって形成された沖積地上に立地している。また、土地の変遷においても「博多」は道路や屋敷地の嵩上げを大規模に幾度と無く繰り返し、砂丘面の盛土が３m近くに及ぶ所もある。これに対して「住吉」では，現在に至る 900 年の間に地盤の嵩上げが 0.8 mと少ない。

二つ目の成果は、旧比恵川以南、住吉神社周辺における歴史的様相が明らかになった点である。今回の調査では、中世～近世の掘立柱建物、井戸、溝、柱穴、小穴などが現地表下 0.8～1 mのマサ土上面で検出された。これらの遺構からは、10 世紀後半～17 世紀の土師器、施釉陶器、焼締陶器、須恵器、磁器、瓦質土器、木器、石製品、輸入銅銭等が出土し，総量コンテナ 198 箱を数える。内容的には「日用雑器」の皿、碗、鉢、すり鉢、鍋、甕、石鍋、石臼と威信財の輸入陶磁器である青磁、白磁、青白磁、施釉陶器、漆塗り椀、銅銭に大別される。

これらの状況から、中世から近世前半における調査地は屋敷地として存在していたと考えられ、遅くとも 12 世紀には屋敷地としての原形が出来上がり、13～15 世紀には隆盛を向かえ、17 世紀前半までは連綿と続いていたようである。

今回の調査により、住吉神社境内を中心とする住吉神社遺跡おいては、中世の博多に勝るとも劣らない状況と歴史的変遷を内包していることが判明した。さらに、博多遺跡との特異点である供献や祭祀に結びつく出土遺物の多さから，住吉神社に深く関係した人々の屋敷地であった可能性が高いと判断される。この状況は、瞰碗などの有田焼の出土から特異階層が近世に至るまで連綿として続いていたことを示すもので、学術的価値の高い成果を得ることができた。

筑前國一之宮　住吉神社　社殿

図　版
PLATES

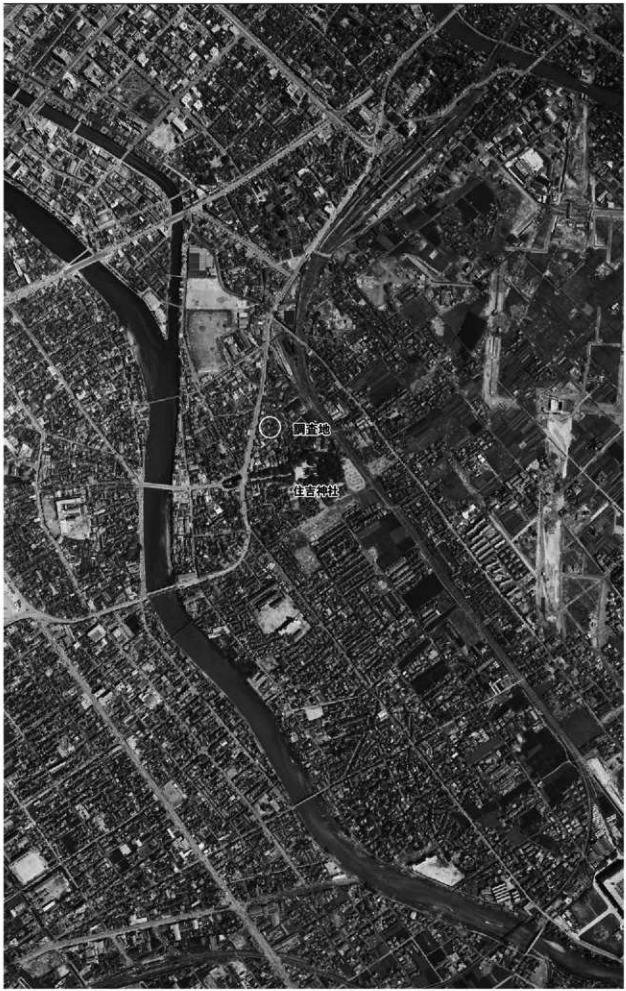
（SK28 調査風景）

調査地周辺航空写真（1947年撮影）

【国土地理院所蔵】

調査地周辺航空写真（1947年撮影）

【国土地理院所蔵】



調査地周辺航空写真（1961年撮影）

【国土地理院所蔵】

調査地周辺航空写真（1969年撮影）

【国土地理院所蔵】

（１）調査地周辺航空写真（2008年撮影）　【国土地理院所蔵】

（２）調査地現況写真（2016年撮影）

（1）調査区全景（東から）

（2）調査区東半部（北から）

（１）調査区西半部（西から）

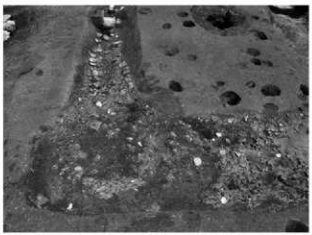
（２）調査区西半部（北から）

（1）溝SD01（北から）

（2）溝SD01獣骨出土状況（東から）

（3）溝SD11・15（北から）

（4）溝SD05・51（南から）


（5）溝SD21・23検出状況（南から）

（7）溝SD21・23（南から）

（6）溝SD21遺物出土状況（北から）

（１）溝SD22（東から）

（２）溝SD44・47（東から）

（３）溝SD60（東から）

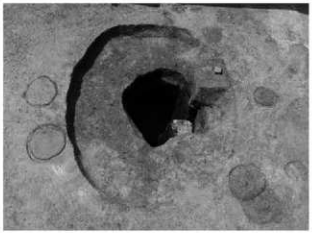
（４）井戸SE07（東から）

（５）井戸SE10（東から）

（６）井戸SE12（西から）

（７）井戸SE12（西から）

（８）井戸SE16（南から）


（1）井戸SE24（南から）

（2）井戸SE24（南から）

（3）井戸SE24（南から）

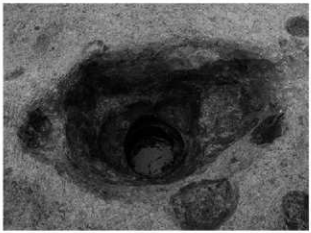
（4）井戸SE32（南から）

（5）井戸SE34（南から）

（6）井戸SE34（南から）

（7）井戸SE34（南から）

（8）井戸SE39（南から）


（１）井戸SE40（南から）

（２）井戸SE40（南から）

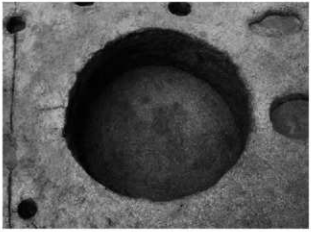
（３）井戸SE40（南から）

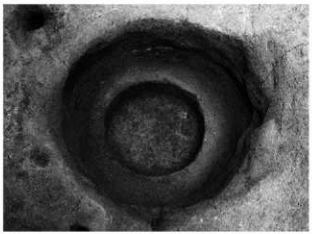
（４）井戸SE41（東から）

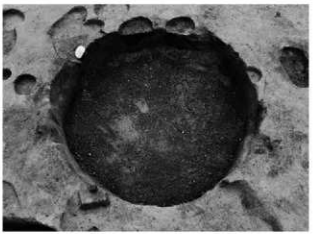
（５）井戸SE49（東から）

（６）井戸SE49（西から）

（７）井戸SE49（西から）


（８）井戸SE53（東から）


（1）井戸SE56（東から）


（2）井戸SE57（南から）

（3）井戸SE58（東から）

（4）井戸SE65（南から）

（5）井戸SE65（南から）

（6）井戸SE66（東から）

（7）井戸SE66（東から）

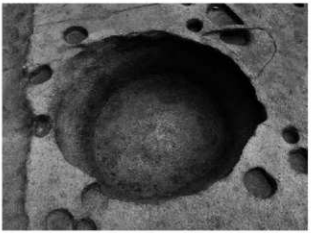
（8）井戸SE66（南から）

（１）井戸SE68（北東から）

（２）井戸SE68（北東から）

（３）井戸SE68（北西から）

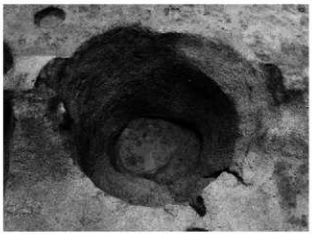
（４）井戸SE76（南から）


（５）井戸SE77（南から）

（６）井戸SE79（東から）

（７）井戸SE82（西から）

（８）井戸SE82（西から）


（1）井戸SE83（東から）

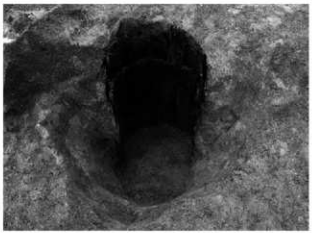
（2）井戸SE84（南から）

（3）井戸SE84（東から）

（4）井戸SE88（東から）

（5）井戸SE89（南から）

（6）井戸SE95（北から）


（7）井戸SE95（北から）

（8）井戸SE95（北から）

（1）土坑SK26（南から）

（2）土坑SK26堆積状況（東から）

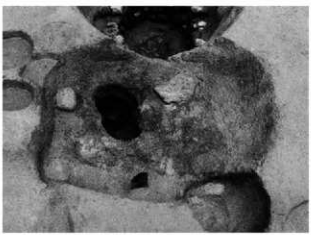
（3）土坑SK28遺物出土状況（西から）

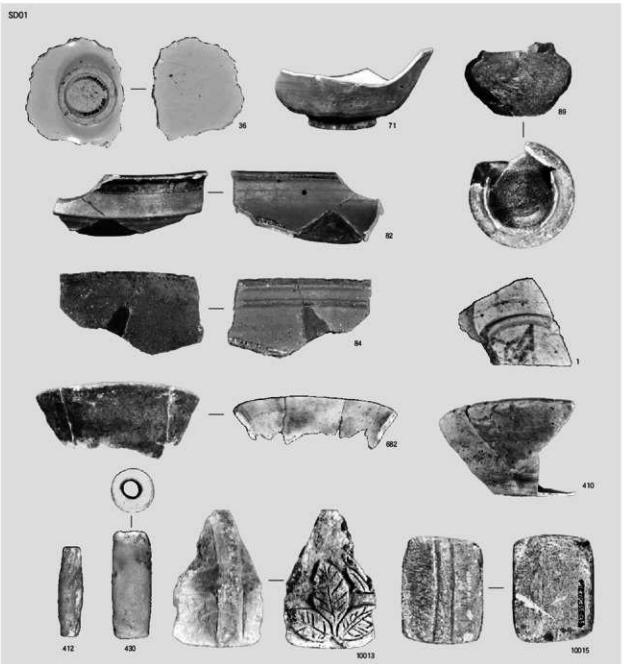
（4）土坑SK28（西から）

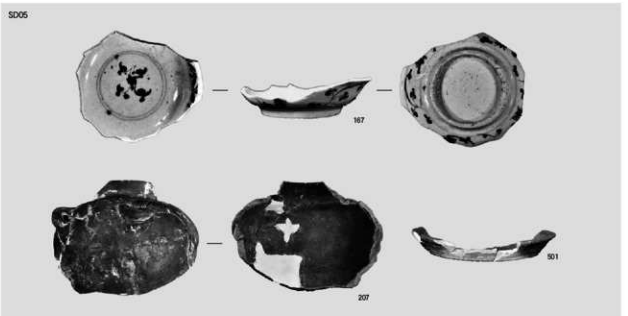
（5）土坑SK33遺物出土状況（東から）

（6）土坑SK50（南から）

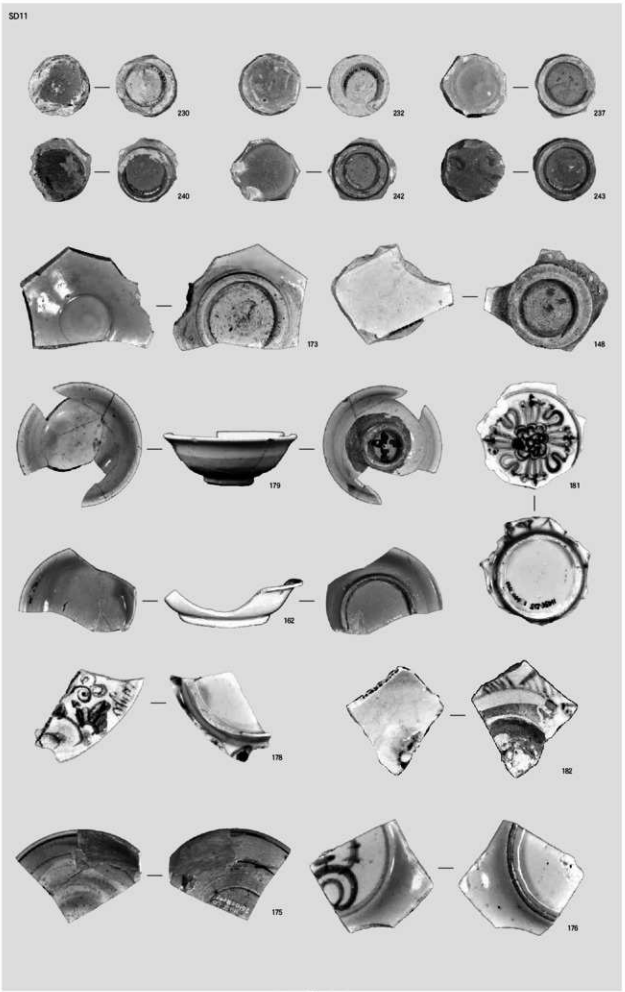
（7）土坑SK54（南から）


（8）土坑SK75（東から）


SD01
36
71
89
82
84
1
682
410
412
430
10013
10015

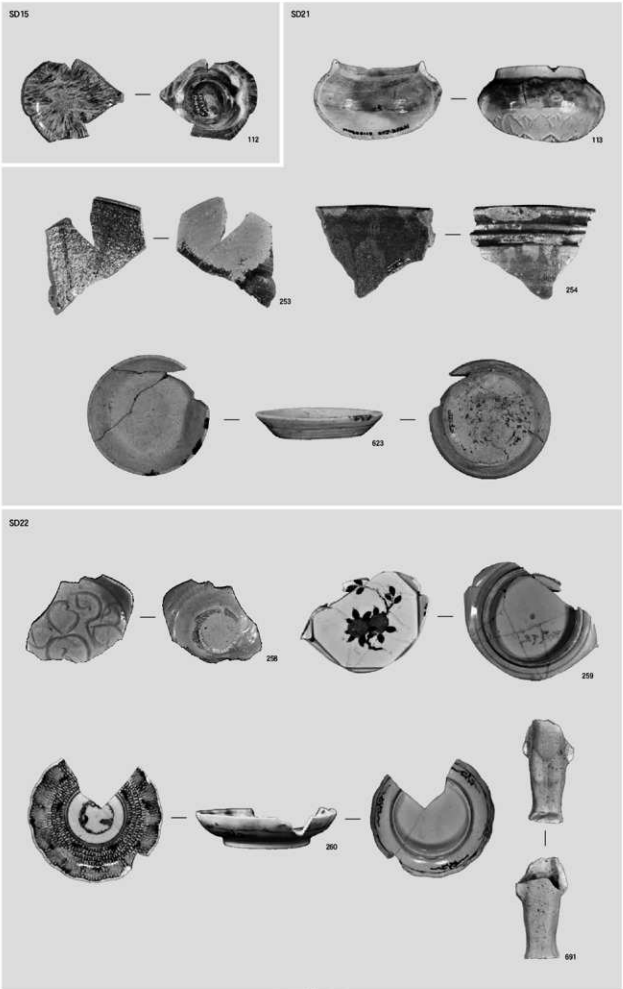

SD05
167
301
207

出土遺物（1）

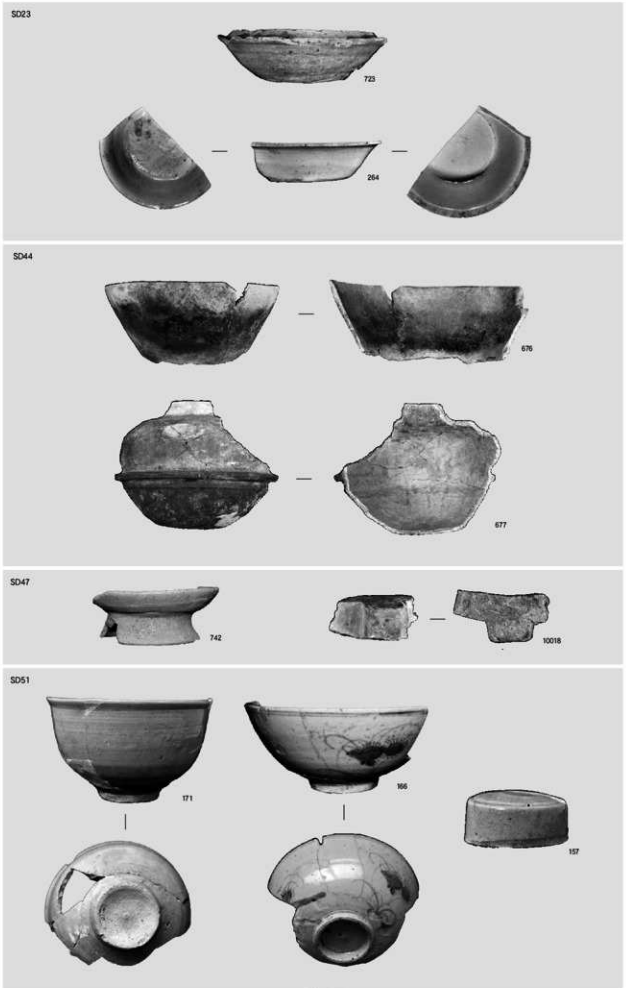


出土遺物（２）

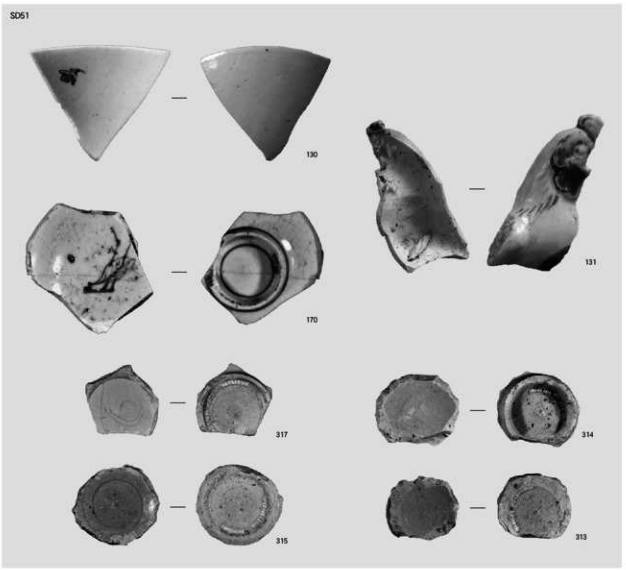
出土遺物（3）

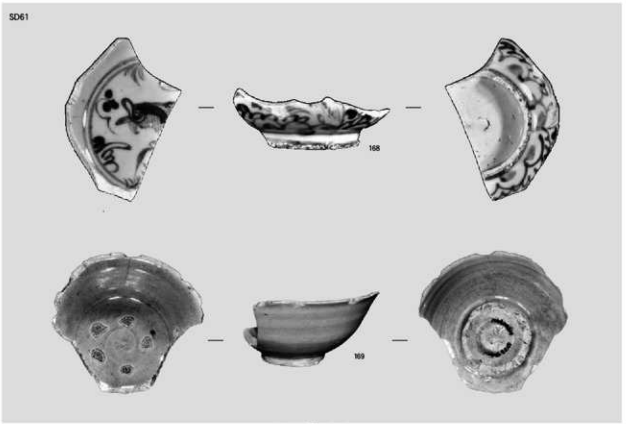


出土遺物（４）

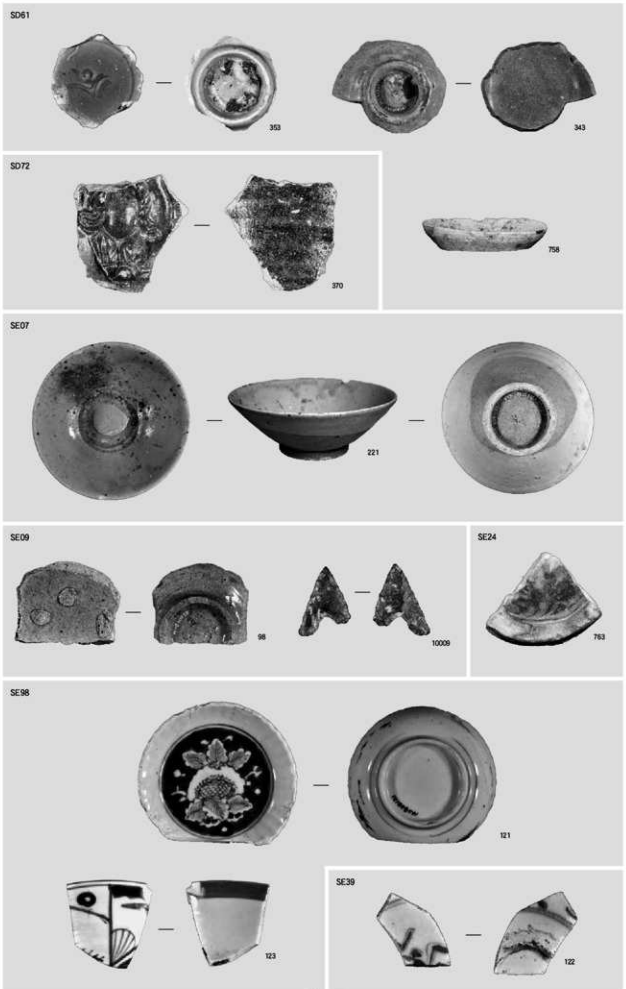


出土遺物（5）

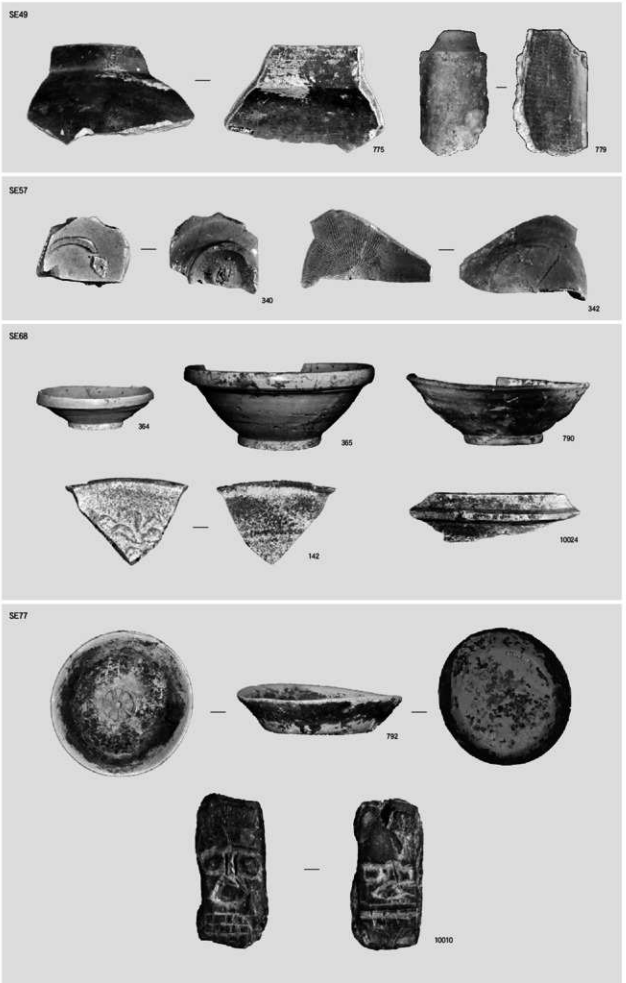




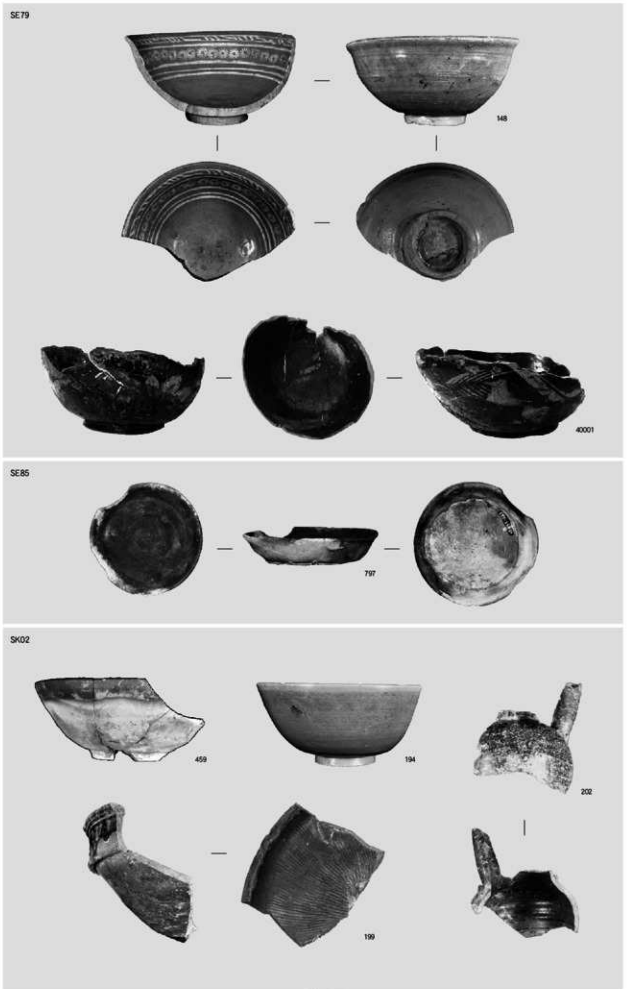
出土遺物（6）


SD61
353
343
SD72
370
758
SE07
221
SE09
98
10009
SE24
763
SE98
121
123
SE39
122

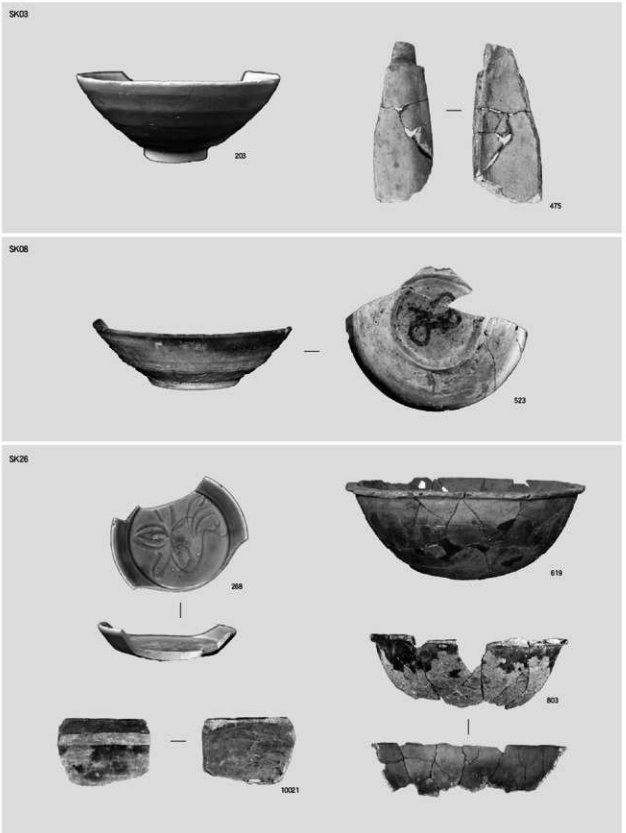
出土遺物（7）


SE49
775
779
SE57
340
342
SE68
364
365
790
142
10024
SE77
792
10010

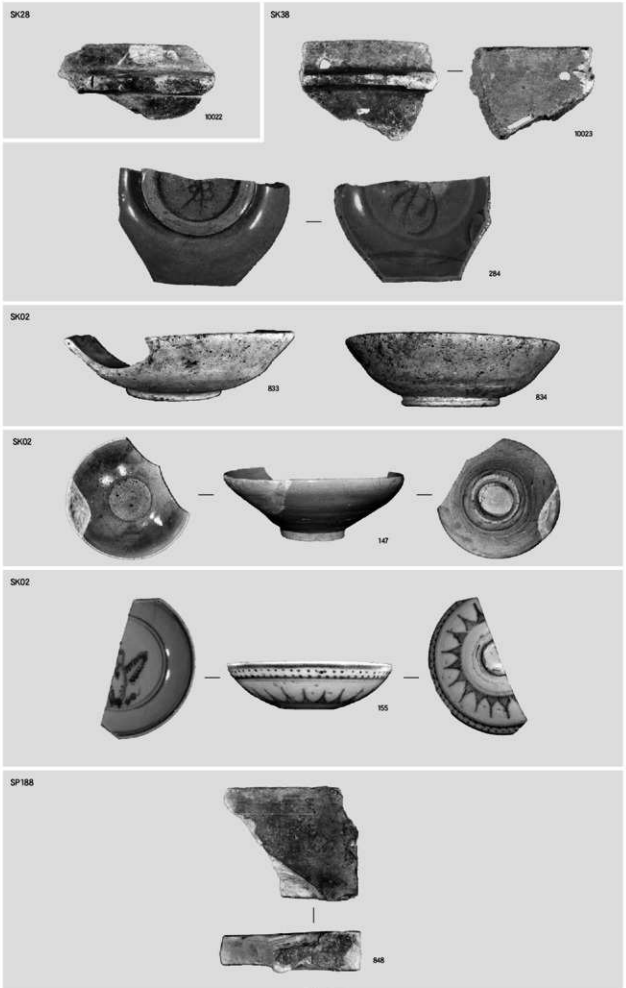
出土遺物（8）



出土遺物（9）



出土遺物（10）


SK28
10022
SK38
10023
284
SK02
833
834
SK02
147
SK02
155
SP188
848

出土遺物（11）

報告書抄録

ふりがな	すみよしじんじゃいせき 2
書名	住吉神社遺跡 2
副書名	第3次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1311集
編著者名	瀧本正志
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8620　福岡市中央区天神1-8-1
発行年月日	平成29年(2017年)3月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (m²)	発掘原因
なかいせき 那珂遺跡	ふくおかけんふくおかし 福岡県 福岡市 はかたくすみよし 博多区住吉二丁目	40132	0085	33° 35′ 13″	130° 24′ 46″	20140520 ～ 20140924	1,317.4	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
那珂遺跡	集落跡	中世後半～近世	掘立柱建物・溝・土坑・井戸	土師器、施釉陶器、焼締陶器、須恵器、磁器、石製品	住吉神社に関連する集落

要約

調査地は，那珂川の堆積作用で形成された標高3mを測る沖積地で，住吉神社の北西150mに位置する駅南場跡地。鎌倉時代の古絵図では，当地は湾入部奥の東岸に位置し，中世からの海外交易拠点都市「博多」と近接しているが御笠川（比恵川）で画されている。これまで古代に創建された住吉神社とその周辺地域の歴史的状況は不明であった。地表下約1mの遺構検出面（地山）は花崗岩風化土のマサ土が堆積した黄褐色砂質土で，上面は標高2mを測る。遺構は，中世～近世の屋敷に関連する掘立柱建物，井戸，溝，柱穴，小穴などを検出した。掘立柱建物は棟筋が溝と並行するものが大半で，柱穴には建物の沈下や揺らぎを防ぐための板石や砥石の措置がなされている。遺物は，土師器，施釉陶器，焼締陶器，須恵器，磁器，石製品等が出土し，総量コンテナ198箱を数える。内容は，12世紀から18世紀に生産された日用雑器の皿，椀，鉢，上鍋，甕，石鍋，石臼と威信財の貿易陶磁器である青磁，白磁，施釉陶器に大別される。今回の調査により，住吉神社境内を中心とする埋蔵文化財包蔵地（住吉神社遺跡）おいては，中世の博多に勝るとも劣らない状況と歴史的変遷を内包していることが判明した。さらに，博多遺跡との特異点である供献や堅砥に結びつく出土遺物の多さから，住吉神社に深く関係した人々の屋敷地であった可能性が高いと判断される。この状況は，墳墓などの有田焼の出土から特異階層が近世に至るまで連綿として居住していたことを示すもので，学術的価値の高い成果を得ることができた。

住吉神社遺跡２

— 第３次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1311集

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1
Tel092(711)4667

発行日　平成29年3月27日

印　刷　有限会社森田印刷所
福岡市中央区大手門2-1-21

THE REMAINS OF SUMIYOSHI-JINJA 2

THE REPORT OF THE THIRD EXCAVATION
OF THE REMAINS OF SUMIYOSHI-JINJA
IN FUKUOKA, JAPAN

MARCH 2017
BOARD OF EDUCATION SECRETARIAT OF FUKUOKA CITY